



**Ultimate Bass Fishing Gear**  
**20th Anniversary**

**DAIWA BASS 2026**





KYOSHA FUJITA

LULU  
best & car

SLP WORKS

22246

6

253-35011

滋賀

10





**Feel Alive.**

最高の瞬間を感じる。





Ultimate Bass Fishing Gear  
20th Anniversary





# STEEZ Brand

## CHRONICLE

- 
- 2006 ● DAIWA渾身のバスブランド“STEEZ”旗揚げ。  
“BASS or DIE”の意思のもと、  
実釣至上主義のロッド&リールを展開。
- 2008 ● バスフィッシングフリークの声を大事に  
アングラーとエンジニアが高い水準でつくり出す  
DAIWA WORKSを正式に発足。  
“STEEZ”ブランドのもののつくりの根幹となる。
- 2013 ● ここぞのトラブルを減少させるSTEEZ SV誕生。
- 2016 ● STEEZ10周年。  
ベイトリールはSTEEZ SV TWハフルモデルチェンジ。  
ロッドは陸っぱりにおける競技性を突き詰めて製作した  
ショアコンペティションシリーズがスタート。  
さらに個性豊かなアングラーと確かな信頼を誇る技術陣が  
つくり出すSTEEZルアー、ラインなどが満を持して登場。  
極限のバスフィッシングを体感できる  
ファミリーブランド“STEEZ”が真の意味で確立。
- 2017 ● 復活を望む声が多かったSTEEZスピニングリール発売。
- 2021 ● ショアコンペティションを含む  
すべてのSTEEZロッドがフルモデルチェンジ。
- 2023 ● 世界へ挑む藤田京弥監督の  
STEEZリアルコントロールが発売。
- 2024 ● シリーズ初のφ32mmスプール搭載  
「ULTIMATECASTING DESIGN」の  
第三世代・STEEZ SV TWをリリース。
- 2026 ● STEEZ 20周年。  
ベイトリールにSTEEZ SV LIGHT TWが登場。  
STEEZロッドは第三世代へ。

実釣至上主義の旗の下、20年——。

“STEEZ”は進化し続けた、と自負している。  
そしてこれからも極限を目指し、走り続ける。









Ultimate Bass Fishing Gear  
20th Anniversary

STEEZ  
Reel  
CHRONICLE

- 2006 ● そのキャストビリティと自重155gを引っ提げ、フラッグシップベイトリール、初代STEEZ登場。さらにEXISTの操作性に加え、バスフィッシングにすべてを振り切ったEXIST STEEZ CUSTOMを同時リリース。
- 2013 ● STEEZ SV誕生。  
「SV」がSTEEZを次世代ベイトに進化させた。
- 2014 ● “リミテッド”の名に恥じない、STEEZ LTD.SV 105XHと並木敏成が心血を注いだSTEEZ LTD. SV 103H-TN発売。
- 2016 ● 極限ベイトリールSTEEZ、10年目の結晶へ。  
第二世代、STEEZ SV TWへフルモデルチェンジ。  
「TWS」がさらなる飛距離とトラブルレスを実現。
- 2017 ● 「TWS」×Tough Reel、STEEZ A TWリリース。  
バスフィッシングのための極限スピニング、STEEZ type-1、2として復活。  
「ZAION製軽量エアローター」「ATD」仕様。
- 2019 ● φ30mmスプールを搭載した  
まさにCompact & Toughなマシン、STEEZ CT SV TWが登場。
- 2020 ● 次世代を担う極限ベイトフィネス機、STEEZ AIR TW発売。  
K.T.F.沢村幸弘氏開発協力の  
φ28mm G1ジュラルミン製AIRスプールを搭載。
- 2021 ● 初期性能が長く続くことを目指した設計思想「HYPERDRIVE DESIGN」  
トラブルレス性と遠投性能を両立させた「SV BOOST」を搭載した  
STEEZ LTD SV TWリリース。  
ハイパーロングキャスト最高峰STEEZ A TW HLCも同時発売。
- 2023 ● Tough Reelの代名詞となったSTEEZ Aも  
「HYPERDRIVE DESIGN」化し、STEEZ AII TWが登場。
- 2024 ● “Pride of STEEZ” 第三世代STEEZ SV TW始動。  
投げの設計思想「ULTIMATECASTING DESIGN」が  
ベイトリールにさらなる革新をもたらした。  
SV BOOST φ32mmスプール、新型「TWS」を装備。
- 2025 ● パーサタイル領域を拡大するSTEEZ LTD CT SV TW。  
Compact & Toughの名機が「HYPERDRIVE DESIGN」と  
最新テクノロジーによりブラッシュアップ。
- 2026 ● STEEZ SV LIGHT TWが満を持してデビュー。





# 「すべては“釣る”ために」 情熱を形に変える20年の軌跡

TEAM DAIWAの意志を継ぐMr.STEEZ。その足跡が未来へと続く歴史を紡ぐ。

「TD-Zの存在はあまりにも大きかった」。

『STEEZ』——。DAIWA 最高峰のバスフィッシングブランドを語る上で、キーマンとなるのが並木敏成。2006年のブランド立ち上げから、今季2026年に20周年を迎える上で、彼抜きでその歴史は語れない。

2000年代初頭、当時その手にはDAIWA最高峰バスロッド・TDバトラー及び同リミテッドの名竿たち。そこに組み込まれたリールは、そう、並木が愛してやまないベイトリールの傑作・TD-Zだった。TDとは、即ちTEAM DAIWA。90年代から長らく築き上げてきたDAIWA最高峰ブランドにして世界最強チームとしての名称。高い壁がそびえる。



今でこそベイトリールは軽量化が進み、ボディを包み込むバーミングを省き常に親指をサムレストに置くことは珍しくない。だが、並木は今から四半世紀以上もの前から、ロッドのトリガーに人差し指を挟むワンフィンガースタイルが主軸。それこそ

がピックアップから矢継ぎ早に放たれる“マシンガンキャスト”の根幹。レフティの並木は常に左手にロッド、右手で巻き、咄嗟のバイトにも瞬時に反応できるスタイルが定着していた。

「バスフィッシングにおいて、軽さがデメリットになることは何もない」

TD-Zは当時としては異例の175g。軽量コンパクトなボディは並木のクイックな動作にも馴染み、セッティングも絶妙だったという。

もはや並木の戦友とも言えるTD-Z。次に発表を控えるモデルの開発は、実は5年半も前から秘密裏に進んでいた。それは並木がBASSMASTER参戦のため渡米していた第1期目の4年間を終えて帰国後の2000年のこと。まだTD-Zさえリリースされていない頃のことだった。

## 現代へと続く新機構 史上最軽量への挑戦

並木は国内におけるビッグタイトルを総なめにした後に渡米するや、わずか1年で日本人初となるBASSMASTERクラシック出場など、トーナメントプロとしての華々しい実績を積み上げてきたことは広く知られる。またメディアでは前述のマシンガンキャストを始め、鮮やかな離れ技の数々を魅せ続けてきた。パフォーマンスのみならず実績を伴った真のプロフェッショナル

は、世の熱い支持を一手に引き受けた。

その一方で、並木はベイトリールの構造にも造詣が深い。並木は新卒社員としてダイワ精工（現グローブライド）に入社してリール企画課に所属していたキャリアがある。そんな経緯も、次世代リールの開発に深く携わる理由となった。

退社してバスプロとして独り立ちして以降もDAIWAベイトの歩みを見つめてきた。一時は渡米資金を賄うべく他社モデルに乗り換えた時期もあった。BASSMASTERクラシック出場を果たした渡米第1期の途で、改めて手にしたTD-Zに至るまでに、様々なテクノロジーが進化したことも確認していた。

「ハンドルがボディから離れ過ぎていた。巻きの軸はボディに近い方が、より安定した巻きができる」

長らくベイトリールと向き合ってきた中で、どうしても解消したい構造があった。今なお並木のガレージに残るのは、オフセットハンドルを搭載したTD-Z。大きな回転を要せず手首だけで巻くことを可能にしたワンオフ。今でこそ標準装備のパーツだが、検証の末、次世代モデルへの採用が決まる。同時に各部も研ぎ澄まされる。「トピックになったのは、当時最軽量の軽さだったね」

実に155g。その数値は人知を超えたスーパーマシンとさえ言わしめた。ボディ剛性を維持したまま、徹底的な軽量化を果たした怪物。また



Namiki

## Chapter 1

# 並木 敏成

ロープロの極限を求め、TD-Z比1.5mmの低床化でグリップングを向上。スプール素材に超々ジュラルミンが採用されたのも初の出来事。さらに軽量化したスプールは、マグフォースVとのマッチングでキャストフィールを格段に向上したのだった。

2006年4月、新たに誕生した次世代機が『STEEZ 103H』。

今改めてボディを見渡すと、フロントにサイド、そしてハンドルノブに至るまでSTEEZのロゴが見える。新たなDAIWA最高峰ブランドを世に広く認知してもらうためのギミックであったことは今でこそ語れる。

## 時代を変えたSVとTWS 勢いを増すハイギア化

「こんなに釣りが楽になるとは…。アメリカ参戦時代にこれがあれば、もっと勝てたかもね」

並木がベイトリールに劇的な進化を感じたのは2013年『STEEZ SV』の登場だった。

初代のボディはそのままにSVスプールへと換装したSTEEZは驚くべき進化を遂げた。当時のSVとは、Stress free Versatileの略称。当時鳴り物入りで登場したTWSの先駆け・T3 SVと同時にリリース。スプールには高強度&軽量のG1ジュラルミンが採用されたのもこの頃だ。「例えるなら初代STEEZはマニュアルシフトのレースカー。ドライバーの技術を要した。対してSVはオートマ車。誰もが簡単に安全に乗りこなせる」

緻密なサミングを要せず過回転によるバックラッシュも低減。もはやノンストレス。「ベイトリール界のすべてが変わった。もはや世界最高レベルに到達したと感じた」

より完成度を高めたSTEEZには2014年、初のリミテッドモデルが登場する。一方は8.1の

XHギアを搭載した撃ちものスペシャル『LTD. SV 105XH』、もう一方は6.3で巻きに特化すべくブラッシュアップを遂げた『LTD. SV 103H-TN』。後者は並木のイニシャルを冠したシグネチャーモデルであることは言うまでもない。「リールを手がけることで始まった自分の釣り人生の結晶。世界最高峰とも言えるリールに自分の名が入った。感無量だった」

赤と黒、ツートンのボディには見る者を圧倒する迫力さえ漂っていた。

春に登場したTNの一方で、その秋にまたエポックメイキングな出来事があった。それまでオープンフラップ型だったTWSが、ターンアラウンド型へと進化。夏にアメリカ市場の見本市・ICASTで発表された初代TATULAは間もなく、国内仕様として世を賑わせることになる。

幾度ものファインチューンが施されたTWSが満を持して投入されたのは、2016年リリースの第2世代『16STEEZ SV TW』。SVとの融合を果たした画期的な新構造だ。

「飛びの放出抵抗がなく、なおかつ巻きでの接触抵抗もない。もうこれ以上はないんじゃないかとも感じた」

ギア比は6.1、7.3のみならず、8.1へ。着々とハイギア化が進んでいったのもこの頃だ。

## 26STEEZ SV LIGHT TW 誕生 第3世代、熟成の時へ

「2018年の『SVライトリミテッド』の存在は大きかった。キャストビリティのレベルが格段に上がった」

並木ほどのプロフェッショナルを以ってしてもこう表現される名機。この頃には2010年代中盤までにベイトフィネスという新たな手法が成熟。次なる着地点としてノーマル機のフィネス寄り、ベイトフィネスとの隙間を埋める存在が求め

られた。5〜7gという境界線がその目安だ。「φ32mmスプール。実釣において不足のないラインキャパ。STEEZのシェイプそのままにφ34mmからの小口径化。太糸でも軽めのルアーが軽快に飛ぶ」



隙間を埋める存在、誰もが求めていたストライクゾーン。ただ惜しむらくは「レベルワインドにTWSが非搭載だった」ことだ。にもかかわらず、SVライトリミテッドがもたらした軽快性は世の熱い支持を受け異例のロングセラーとなった。

2026年、φ32mmスプールの24STEEZに続く第3世代STEEZとして産声をあげるのが『STEEZ SV LIGHT TW』。いよいよあのモデルに最高峰の名が冠された。

「24STEEZで使うルアーより軽め、5〜7gのルアーが圧倒的に投げやすい」

第3世代の完成度が極まっていく。いずれも軽量かつコンパクトで剛性感も高い。時代の変化とともに、使い勝手が向上していく。

「極め付けはギア比9.2:1。ハンドル1回転92cm。撃ちの釣りで優位に立てる。クランクにしても俺はローギアを使わない。持ち替えて感覚を変えたくない。自分で巻きのスピードを変えればいいだけ。何より掛けてからの回収力にスピード感が欲しい」

竿は変わっても掌の中は変えたくない。限界ハイスピードは相手に主導権を与えぬままにゲームを完遂できる。

何より“釣る”ことに最大のプライオリティを置く並木の矜持がそこに垣間見えている。



## Chapter 2

# 青木 大介

# 求めたのは“戦える”武器。 最高の瞬間を味わうために

24STEEZにまつわる電撃移籍の舞台裏、復帰間もなくトップ50 A.O.Y.獲得の原動。

「『実はφ32mmスプールの計画がある』。そのひとことが、俺の背中を押した」

2022年末、4年間の米国ツアートレイルを終え、戦いの舞台を再び日本へと移すことを決めた青木大介。翌年からの国内戦復帰へと向けたストーブリーグの中、DAIWAとの契約を結ぶ決め手となったのは冒頭の通りだった。そう、24STEEZ SV TW100の開発は既に進み、そのキーマンとして招聘されたことに感銘を受けたことがきっかけとなったのだという。

「長らくφ32mmのペイトリールが主力。そのフィーリングを大切にしていた、他に替えを求めていなかった。度重なる話し合いの場で、DAIWAペイトの性能が良いのは重々承知だったが、自分のフィーリングにドンピシャでマッチするリールがないと断り続けてきた。φ34mmのDAIWAペイトをまずは持ち帰って試してくれと言われても、食指は動かなかった」

米国滞在中の際、また束の間の帰国の際、幾度ものDAIWAから契約の打診を受けるも「移籍は難しい。自分の中に気持ちがない」と首を横に振り続けた。

帰国を考えた当初は、再び国内戦に復帰する気持ちもなかった。数年メディアで活動したのち、再び気分が乗れば試合復帰の機会を窺うとも考えていた。だが、帰国直後から一転、青木の戦う本能は再燃し始めていた。

かつては国内最高峰 JBトップ50で3度ものA.O.Y.を獲得してきた青木。だが、ひとたび国内を離れれば、そこに席はない。再び下部カテゴリーへ出場して年間上位の好戦績を叩き出さなければ、トップカテゴリー再昇格の権利は与えられない。

折しも元スポンサーは、青木が国内復帰を決めた年、JBから撤退を決めた。

「俺のリールを露出できない。何よりこれまで作ってきたルアーを試合で使うこともできない。これから作ったとしても、プロモーションさえできないジレンマが生じた」

元スポンサーからの引き止め、DAIWAからのオファー。それでも青木は移籍を躊躇った。

「俺の開発したモデルをこれまで買ってくれたユーザーに申し訳が立たない」

青木自身の道義心がそこにある。ただ何より、国内戦復帰に際して本気で戦っていく上で、タックル面で支障が出ることは避けたい。いつしか冒頭の通り、青木の衝動は突き動かされたのだった。



## 24発表まで空白の1年 開花へ向け守備固めの1年

24STEEZ SV TW発表前の1年間は、JBセカンドカテゴリーのマスターズ、ローカルシリーズの河口湖A及びBの3シリーズに参戦。翌年にトップカテゴリー・トップ50へ復帰する権利を得るには、1シリーズではなく3シリーズへと幅を広げ、どれか1つでも年間上位を獲得する必要があった。

「スピニングはDAIWAが明らかに優れていることは以前から知っていた。それまで以上に軽快に扱うことができた。ペイトはφ32mmスプールが自分の右腕というものの、他が使えないわけじゃない。自分のこだわりであって、フィーリングの問題」

この年の主軸となるペイトリールはSTEEZ LIMITED SV TWとジリオン SV TW。共にφ34mmスプールだが、いずれもシャロースプールへと換装することでφ32mmのフィーリングへ近付けて使っていたという。

「今でこそSTEEZは24STEEZ SV TWが主力だが、ややボディの大きいジリオンは力強い巻きに向いている。3/8oz.以上のスピナーペイトなど、しっかり手で包んで巻くときはこれくらいの方が手に馴染む。今もデッキに並ぶ武器のひとつ」

2023年に全戦出場した3シリーズはいずれ





## Daisuke Aoki

も好戦績を収め、中でも河口湖Bでは年間2位を獲得。1位選手が現役トップ50選手のため、昇格権利は繰り下げとなり、青木はわずか1年でのトップ50再昇格を決めた。

翌2024年、実に6年ぶりのトップ50復帰と同時に、24STEEZ SV TWがその手に握られることになった。

「もうこれしか使えないな。そう語ったこともある。一番自分の釣りでやりたいことが幅広くできる。軽量コンパクトで軽く握りやすく、自然とシェイクのリズムも刻みやすい」

スピニングでもベイトでも、青木の真骨頂は繊細なシェイク。独特のリズムが竿からライン、そしてルアーへと生命感を与え、獲物の食い気を誘いバイトへと繋ぐ。まるで青木だけ別次元にいるかのような瞬間が度々起こる。その原動力は道具への信頼の証とも言えそうだ。

トップ50昇格後も国内復帰初年度と同様に、マスターズと河口湖ABでフル参戦に挑み、この2年は12+5の計17戦に出場。若手を彷彿とさせる試合数だが、43歳となった今も現場に立ち続けるのが国内復帰後のスタイル。現場のリアル、フィールドの今を常に肌で感じ続けることが、青木の成長を促し続けている。

### 「もうこれしか使えないな」 テスト時に手が得た直感

シーズン中は毎週のように開催されるトーナメントの合間を縫って、STEEZ SV TW100の開発は秘密裏に行われてきた。

「最初に触ったのは真冬。2月だったと思う。プロスタッフ数名が集まって丸一日投げ倒して、DAIWAエンジニアと共にブレーキのセッティング出しを詰めていった。24STEEZはまさにプロスタッフみんなで作り上げていったルール」

まだ数に限りがある初期プロト。そのフォルム

はまだ今とは異なっていた。テストの場合は某所の管理釣り場。一般アングラーにその形状を悟られてはならないためだ。

テストは飽くまでプレーキシステム・SV BOOSTが対象。新たに搭載されるφ32mmG1ジュラルミン製スプールとの相性を確認すると共に、複数のプロスタッフによるフィーリングの確認作業。ひとりでは偏りがちなデータを複数人が検証することで、誰でも快適に扱える最適値を割り出せる。「テストってこうなんだって。いや、こうあるべきものなんだって再確認した」

DAIWAの開発姿勢にリスベクトの感情が生まれたという。だが、この時点では24STEEZ SV TWの本領は確認できていない。後に「もうこれしか使えない」と確信に至るきっかけとなったのが、初夏6月の野尻湖でのこと。次なるテストも複数のプロスタッフと共に行われた。「前回のテストでの結果が反映されているかの確認。続けて、どのくらいのルアーまで使いこなせるのかを試していく中、この時点で既に実戦で使うイメージが湧いてきた」

このテストでは調整済みの内部構造に加え、そのフォルムも既に完成品と同等の仕上がりを見せていた。16STEEZとの比較で、中心軸から左右3.1mmのコンパクト化は青木の手に吸い付くように馴染んでいた。

「初登板は23オールスター。1/4oz. テキサスをアシに打ち、シェイクしながら上から段階的に落としていく釣りで『もうこれしか使えないな』って」

翌年から青木の主力機となったことはもはや言うまでもないだろう。

### φ32mm スプールの軸に さらに戦力を増強の時へ

トップ50復帰から2年目となる2025年。青木はシリーズの折り返し地点となる第3戦遠賀川

で優勝を勝ち獲るや、年間暫定2位に浮上。最終戦霞ヶ浦を前に暫定首位との差をわずか1ポイントまで詰めた。

折しも個体数の減少が叫ばれる霞ヶ浦水系。長い夏を過ぎ、秋の兆しを見せはじめた季節の狭間は、バスの活性を著しく低下させていたことは間違いない。

ところが青木は初日から気を吐いた。2本のビッグフィッシュを仕留めトップウェイトで試合をリード。2日目は1本ながらもキロフィッシュを仕留め、予選2位での決勝進出。最終日決勝はプレッシャーが極まり、半数がゼロ申告となる中、またしても価値ある1本を仕留め、表彰台上の2位を獲得した。同時にA.O.Y.レースも制して、堂々の年間首位に輝いたのだ。

2017年以来、通算4度目のA.O.Y.。史上首位タイを記録。DAIWA 移籍後、初のビッグタイトルの獲得となった。

トップ50通算6勝目を飾った遠賀川、準優勝に輝いた最終戦霞ヶ浦。共に帰着まで残り2時間を切った段階で、起死回生の1本を仕留めた青木。遠賀川に至っては2本目も捕獲した。通常であればもはや諦めも脳裏にチラつく時間帯だが、攻めの姿勢を貫いた結果がそこに現れた。「経験をうまく活かせるようになってきた。ブラで見つけたヒントが試合で活きる。勝つ時ってそういう感覚がある」

青木に2025年のMVP タックルを訊くと、「間違いなく24STEEZ SV TW」と即答。6勝目の原動力であったことに加え、青木のデッキには常に使い込んだ複数台が並んでいたことがそれを物語っている。

「来季はSV LIGHT TWの出番が確実に増える。元々φ32mmはベイトフィネス寄りもこなせる包容力がある。ギア比9.2も魅力」

青木の戦力がさらに増強され、歓喜の咆哮「Feel Alive」を聞く機会も増えていきそうだ。



# マニュアルからオートマへ STEEZ AIR 誕生前夜、革命の始まり

第3世代STEEZへと繋いだ原石T3 AIR。ベイトフィネス新時代が幕を開けた。

“ベイトフィネス”。それは現代バスフィッシングにおける主流のひとつ。その歴史は比較的浅く、日本が世界へと発信した数あるメソッドのひとつだ。

2000年代後半にK.T.F. 沢村幸弘氏が提唱するや浸透し始め、2010年代には年を経るごとに熟成して一気に隆盛した感がある。いち早くその有効性に着目したトーナメントプロたちは、日々試行錯誤を続け正解への糸口を探っていたのだ。

5gを下回る軽量ルアーを如何に精度高くターゲットの居場所へと送り込めるか。初期はロッド、リール共に明確な指標は見付からない。かつて2000年代初頭にパワーフィネスがそうであったように、自作やチューニングなどが盛んに行われていた時期でもあった。

その頃、ベイトフィネス黎明期にいち早く注目されたベイトリールといえば、リベルトピクシー。小型かつ軽いルアーを快適に扱える軽量コンパクトを謳ったファンフィッシングの代名詞的存在だった。ところがアンテナが鋭く立ったトーナメントプロたちは、このモデルを如何に実戦投入すべきかに日夜明け暮れていたのだ。

しかし、元々小型の巻き物を守備範囲としていたリベルトピクシーには限界があった。現代では巻き物に使われるギア比5台は、撃ちにおいてはディスアドバンテージとなる。

霞ヶ浦を主舞台とする赤羽修弥や橋本卓哉、トップ50で全国フィールドを巡る川口直人らのハイギア化の強い要望。DAIWAがそこに応えたのが件のリベルトピクシーをベースとするPX68。その数字がギア比。先代の小型の筐体に仕込める最大のギアは6.8が限界だった。それでもフィールドの変化に敏感なアングラーは飛びついたものだ。

「まだまだベイトフィネスがどんなものなのか、ハッキリとわからない、何が正解なのかもわからない時代だった」

ベイトフィネスに傾倒し始めていた川口直人は、当時をこう振り返った。

## 「リールに失礼だ」 右から左へ巻きの矯正

「ベイトフィネスに真剣に取り組んだきっかけは2013年リリースのT3 AIR TW。軽いものでもφ32mmスプールがよく回る。さらには当時の最速ギア比8.6。開発テストでその存在を知って、コレってすごいことができるんじゃないかって」

開発にはあのベイトフィネスの父・沢村幸弘氏が参画した最初期作。その時受けた衝撃は長らく心から消えることがなかった。「何より3.5gが普通に投げられるリールなんてなかった。そこが衝撃。ベイトフィネスがさらに

研ぎ澄まされてきたなって」

リリース前年の秋、春のリリースまでの半年間。川口は左巻きリールを完璧に使いこなすべく、自主練習を繰り返した。

「こんなすげえリールが出るなら、右巻きで竿を持ち替える手間がもったいない。左巻きでより効率の良い釣りに切り替えなきゃリールに失礼だって」

試合で使うなら100%では不十分。「120%で戦える」状態へと自身をスティックなまでに追い込んでいった。



手元に届いたT3 AIR TWは、その前年に仕上げたSTEEZ ハーミットに組み込まれた。SVFコンパイルXを採用したハーミットはブラックにオレンジの差し色。川口のベイトフィネスコンボはそれぞれ配色を示し合わせたかのようなマッチングを見せる。川口が善戦してきた試合の多くは、その実弾にネコスト(現STEEZネコストレート)を選抜。3種の神器とも言えるマネーベイト、



## 川口 直人

いやマネータックルとも呼べる存在だった。

T3 AIR TW が後の STEEZ に多大なる影響を与えたことは言うまでもない。現行モデルへと続く TWS、G1 ジュラルミンスプール、そしてエアブレーキシステム。STEEZ の名を冠せずとも、ルーツを辿れば現行第3世代へと続く礎だったことは明らかだろう。

### 実用範囲の明確化 ベイトフィネスの熟成

その後、T3 AIR TW は STEEZ ハーミットと共に長きに渡り、川口の主戦力のひとつとして第一線で活躍してきた。他のベイトフィネスリールが続々と登場したのもこの時期だが、それらには目も配ることもなかった。

「誰よりも長く使ったと思います。キャスト後半の伸びがどれよりも秀逸。キャストがパッチリ決まるのはこれしかなかった。だけど、足掛け8年ほど使い込んできた2020年。あれだけ好きで使い込んできた T3 AIR TW をいよいよ手放す時が来た」

それが『STEEZ AIR TW』だった。TWS・G1 ジュラルミン・エアブレーキシステムはそれぞれ進化を果たして、オープンフラップ型からターンアラウンド型へ、φ32mm から φ28mm へ、など劇的な進化を遂げたのだ。

優れた回転性能はロッドを鋭く振らずとも狙いのスポットへ低弾道で飛んでいく。突き抜けるライン放出性能の一方で、エアブレーキは低速時と高速時で最も適したブレーキ力を生み出す。先代のベイトフィネス機との比較で最も進化を遂げていたのは、ブレーキ設定だった。「一度ブレーキ設定すれば、再設定する必要がない。かつては3モード×20段階、合計60段階ある、いわばマニュアル車。性能は申し分ないけど、ユーザーを置き去りにしていた感もあった

のは事実」

この頃にはベイトフィネスのメソッドも熟成を遂げ、実用的なリグ総重量は4〜5グラムと認識。その範疇にブレーキ力を一度決めれば、オーバーヘッドでもピッチングでもトラブルなく自在なキャストが可能となる。いわばプロアングラー目線の F1カーから、オートマ車へと変換したイメージだ。「T3 AIR TW の頃はまだまだベイトフィネスが成熟していない時代だった。投げることができるルアーを1gでも軽くしたい。そんな方向性が強く、実用範囲をないがしろにしていたのかもしれない」

DAIWA ベイトフィネスの進化はリールのみならず、無論ロッドにも注がれていったのは自然な流れだった。

### AIR、ハーミット、ネコスト = STEEZ “三種の神器”

「ネコストレート5.8インチのネコリグ、各種小型プラグ、トレーラー合わせて5g前後のスモババ」

いつしか定着していった5gという、ベイトフィネスの数字。無論、時にそれより軽いものも使う場合もある。だが、実用的な範囲、スイートスポットはそこにあった。

「初代ハーミットを作った頃はベイトフィネス黎明期だったこともあって、基本的な考え方としてスピニングでは重い、ベイトでは軽いルアーを投げるための中間的な存在として開発がスタート。ベイトフィネスがどういったものなのか完全にはわかっていなかった」

ティップを繊細に仕上げるためのソリッドに、細身肉厚のチューブラブランクはフルソリッドに近い操作性を獲得。だが、単純にスピニングロッドのガイドをベイト仕様へと載せ替えるだけでは竿として機能しない。ひとこと言えばバットの存在を強調することで、ハーミットは形作られていったという。

2020年に『STEEZ AIR TW』へと乗り換えた川口は、次なる野望を抱いた。

「とにかくキャストが決まる。かつてよりさらに極まった。そこに新たなロッドの性能が加われば、より小技が利いて無敵のベイトフィネスが期待できる」

9年の歳月を経て、2021年に2代目 STEEZ ハーミット C64L-SV・ST が産声を上げることになった。今季26年には、さらに3代目となる STEEZ ハーミット C64UL-ST・BF へと生まれ変わる。



「何より新モデルを開発するごとに DAIWA のテクノロジーが劇的に進化していくのに驚いた。ボトムでのタッチ感度はもちろんのこと、中層の釣り、特にミドストをやって、どこを引いてきているのか、どのレンジにいるのかが明確にわかる。水押しでの感度が伝わるなんて、そんな時代が来たのも DAIWA の技術力のおかげ」

かつては手探りの感があった中層の釣りが手に取るようになる千里眼コンセプトを採用。ミドストの名手・川口の釣りが誰にでも体感できる時代がついに訪れたのだ。

2025年以降、全国ツアーをトレイルする JB トップ50から、霞ヶ浦〜利根川の広大な水域を舞台とする MLF Japan へと主戦場を移した川口。STEEZ ハーミットと STEEZ AIR TW、そして STEEZ ネコストレート、その番は以前よりもさらに登板回数を増やしつつあるという。

川口のデッキから、今なおベイトフィネス・スベシャルコンボ・三種の神器が消えることはない。



HYPERDRIVE  
DESIGN  
ULTIMATECASTING  
DESIGN  
TWS  
T-Wing System  
SV  
BOOST



100

## STEEZ SV TW

"Pride of STEEZ"

心ゆさぶる瞬間を、ずっとその手に。

STEEZシリーズで長らく空いていたφ32mmの穴を埋めるザ・バーサタイル。投げの設計思想 ULTIMATECASTING DESIGN が、もっと遠くへ、より正確にルアーを運ぶ。もうひとつ大きな特徴はゼロアジャスターが存在しない。かつてメカニカルブレーキと呼ばれた機構を取り除いた。

SV  
CONCEPT

品名	巻取り長さ (cm)	ギア 比	自重 (g)	最大ドラグ力 (kg)	標準巻糸量 ナイロン (lb.-m)	ハンドル長さ (mm)	ベアリング ボール/ローラー	価格 (¥)	JANコード
ステイズ SV TW									
100	67	6.7	160	5	12-40~80.14-35~70	85	12 / 1	79,500	3 344299*
100L	67	6.7	160	5	12-40~80.14-35~70	85	12 / 1	79,500	3 344305*
100H	78	7.8	160	5	12-40~80.14-35~70	85	12 / 1	79,500	3 344312*
100HL	78	7.8	160	5	12-40~80.14-35~70	85	12 / 1	79,500	3 344329*
100XH	85	8.5	160	5	12-40~80.14-35~70	85	12 / 1	79,500	3 344336*
100XHL	85	8.5	160	5	12-40~80.14-35~70	85	12 / 1	79,500	3 344343*

◎ハンドルノブS交換可 ◎ソルト対応

HYPERDRIVE  
DESIGN  
ULTIMATECASTING  
DESIGN  
TWS  
T-Wing System  
SV  
BOOST



100XXH

## STEEZ SV LIGHT TW

"Ultimate Light Versatile"

さらに低く、さらに奥へ。アプローチは加速する一。

スプールの高レスポンス化により、さらなる低弾道キャストとキャストアキュラシーが向上。複雑で高精度なキャストが要求されるハイプレッシャーフィールドでこそ真価を発揮する、究極のライトバーサタイルモデル。ギア比は7.8とシリーズ最速となる9.2をラインナップ。

SV  
CONCEPT

品名	巻取り長さ (cm)	ギア 比	自重 (g)	最大ドラグ力 (kg)	標準巻糸量 フロロ (lb.-m)	ハンドル長さ (mm)	ベアリング ボール/ローラー	価格 (¥)	JANコード
ステイズ SV LIGHT TW									
100H	78	7.8	160	5	8-40~80.12-25~50	85	12 / 1	79,500	3 344374*
100HL	78	7.8	160	5	8-40~80.12-25~50	85	12 / 1	79,500	3 344381*
100XXH	92	9.2	160	5	8-40~80.12-25~50	85	12 / 1	79,500	3 344398*
100XXHL	92	9.2	160	5	8-40~80.12-25~50	85	12 / 1	79,500	3 344404*

◎赤字文字は新製品です ◎ハンドルノブS交換可 ◎ソルト対応



TWS  
T-Wing System

KTB 開発協力



500H

## STEEZ AIR TW

突き抜ける競技仕様=AIR。  
ベイトフィネス究極マシン。

ベイト史上で最小口径となるφ28mmG1ジュラルミン製 AIR スプールを搭載。1g 台の超軽量ルアーで素早く立ち上がり、TWS とのシナジーでスムーズなライン放出を約束。コンパクトボディには超軽量かつ高剛性マグネシウムを採用。その自重、実に135g へ。

BF  
CONCEPT

品名	巻取り長さ (cm)	ギア 比	自重 (g)	最大ドラグ力 (kg)	推奨巻糸量 ナイロン (lb.-m)	ハンドル長さ (mm)	ベアリング ボール/ローラー	価格 (¥)	JANコード
ステイズ エア TW									
500H	60	6.8	135	3.5	6-45.8-45	80	12 / 1	73,000	2 266512**
500HL	60	6.8	135	3.5	6-45.8-45	80	12 / 1	73,000	2 266529**
500XXH	80	9.1	135	3.5	6-45.8-45	80	12 / 1	73,000	2 266536**
500XXHL	80	9.1	135	3.5	6-45.8-45	80	12 / 1	73,000	2 266543**

◎ハンドルノブS交換可 ◎淡水専用



HYPERDRIVE  
DESIGN  
ULTIMATECASTING  
DESIGN  
TWS  
T-Wing System  
CT



70XH

## STEEZ LTD CT SV TW

"Evolution of STEEZ"

キャストするたび、アングラーを歓びで満たす。

CT=コンパクト&タフコンセプトにおける集大成。G1ジュラルミン製φ30mm CT SVスプールを搭載し、ラインキャバを敢えて絞り込み、最大巻糸量に制限を掛けた。それは5gを下回るリグにも対応する優れた高回転性能を実現する“究極の高レスポンススプール化”のために他ならない。

SV  
CONCEPT

品名	巻取り長さ (cm)	ギア 比	自重 (g)	最大ドラグ力 (kg)	標準巻糸量 ナイロン (lb.-m)	ハンドル長さ (mm)	ベアリング ボールローラー	価格 (¥)	JANコード
ステイーズ LTD CT SV TW									
70XH	80	8.5	160	4.5	8-25~50.10-20~40	85	12 / 1	83,000	3 503139 *
70XHL	80	8.5	160	4.5	8-25~50.10-20~40	85	12 / 1	83,000	3 503146 *

◎ハンドルノブS交換可 ◎ソルト対応

TWS  
T-Wing System  
CT



700H

## STEEZ CT SV TW

超軽量ルアーも守備範囲。  
コンパクト&タフの軽快性。

φ30mmG1ジュラルミンスプールは、ベイトフィネスからビッグベイトまで幅広いウェイトに盤石。CTの名の由来となったコンパクトボディは、外部ダイヤルウインドウさえ排除したパーミングしやすいフォルム。激戦区で釣果をもたらす最先端のバーサタイル機だ。

SV  
CONCEPT

品名	巻取り長さ (cm)	ギア 比	自重 (g)	最大ドラグ力 (kg)	標準巻糸量 ナイロン (lb.-m)	ハンドル長さ (mm)	ベアリング ボールローラー	価格 (¥)	JANコード
ステイーズ CT SV TW									
700H	59	6.3	150	4.5	12-35~70.14-30~60	80	12 / 1	65,000	2 005036 **
700HL	59	6.3	150	4.5	12-35~70.14-30~60	80	12 / 1	65,000	2 005043 **
700SH	66	7.1	150	4.5	12-35~70.14-30~60	80	12 / 1	65,000	2 005050 **
700SHL	66	7.1	150	4.5	12-35~70.14-30~60	80	12 / 1	65,000	2 005067 **
700XH	76	8.1	150	4.5	12-35~70.14-30~60	80	12 / 1	65,000	2 005074 **
00XHL	76	8.1	150	4.5	12-35~70.14-30~60	80	12 / 1	65,000	2 005081 **

◎ハンドルノブS交換可 ◎ソルト対応

HYPERDRIVE  
DESIGN  
TWS  
T-Wing System  
MAG SEALED  
MAG-Z  
BOOST



1000H

## STEEZ All TW

圧倒的な飛びと確かな巻き。  
フルメタルボディのタフ最高峰。

AL製フルメタルハウジングのタフさはそのままに、ハイバードライブデジギアがさらに回転性能を磨き込んだタフモデルの最高峰。φ34mmG1ジュラルミンMAG-Zスプールには16lb.×90mを収納して、中〜重量級ルアーでより高レスポンスかつ遠投性能を発揮。

LC  
CONCEPT

品名	巻取り長さ (cm)	ギア 比	自重 (g)	最大ドラグ力 (kg)	標準巻糸量 ナイロン (lb.-m)	標準巻糸量 PE (号-m)	ハンドル長さ (mm)	ベアリング ボールローラー	価格 (¥)	JANコード
ステイーズ All TW										
1000	67	6.3	190	6	14-100.16-90	1.5-180.2-150	90	10 / 1	56,500	3 309700 **
1000L	67	6.3	190	6	14-100.16-90	1.5-180.2-150	90	10 / 1	56,500	3 309717 **
1000H	75	7.1	190	6	14-100.16-90	1.5-180.2-150	90	10 / 1	56,500	3 309724 **
1000HL	75	7.1	190	6	14-100.16-90	1.5-180.2-150	90	10 / 1	56,500	3 309731 **
1000XH	90	8.5	190	5.5	14-100.16-90	1.5-180.2-150	90	10 / 1	56,500	3 309748 **
1000XHL	90	8.5	190	5.5	14-100.16-90	1.5-180.2-150	90	10 / 1	56,500	3 309755 **

◎ハンドルノブS交換可 ◎ソルト対応

HYPERDRIVE  
DESIGN  
TWS  
T-Wing System  
MAG SEALED  
MAG-Z  
BOOST



6.3R

## STEEZ A TW HLC

MAG-Z BOOSTで  
遠投性能を極めるタフ堅牢モデル。

タフで堅牢なSTEEZ A TWに磨きをかけ、φ36mmMAG-Z BOOSTスプールを搭載。さらなる遠投性能を手に入れたフラッグシップブランドSTEEZの遠投リール。ハイバードライブデジギア搭載で、強度UPと回転フィーリングUPを実現した。

LC  
CONCEPT

品名	巻取り長さ (cm)	ギア 比	自重 (g)	最大ドラグ力 (kg)	標準巻糸量 ナイロン (lb.-m)	ハンドル長さ (mm)	ベアリング ボールローラー	価格 (¥)	JANコード
ステイーズ A TW HLC									
6.3R	71	6.3	190	6	16-100.20-80	90	8 / 1	56,500	3 121487 **
6.3L	71	6.3	190	6	16-100.20-80	90	8 / 1	56,500	3 121494 **
7.1R	80	7.1	190	6	16-100.20-80	90	8 / 1	56,500	3 121500 **
7.1L	80	7.1	190	6	16-100.20-80	90	8 / 1	56,500	3 121517 **
8.1R	91	8.1	190	5.5	16-100.20-80	90	8 / 1	56,500	3 121524 **
8.1L	91	8.1	190	5.5	16-100.20-80	90	8 / 1	56,500	3 121531 **

◎ハンドルノブS交換可 ◎ソルト対応



# STEEZ Rod CHRONICLE

- 2006 ● TEAM DAIWAからSTEEZへ。  
DAIWAバスタックルのハイエンドブランドが  
その意思とともにSTEEZに継承。  
STEEZロッドは12アイテムでローンチ。
- 2007 ● 並木敏成の代名詞的なロッド、  
初代MACHINEGUNCAST type-I、type-IIをリリース。
- 2008 ● WEREWOLFをはじめ、4モデルを追加。
- 2011 ● ベイトフィネス元年、赤羽修弥監修のSKYRAYを発表。  
Basser All Star Classicのウイニングタックルとなる。
- 2013 ● ボート、オカッパリを問わず中・重量級のパーサタイルモデル  
FLANKERをはじめ、4本をリリース。
- 2014 ● MACHINEGUNCAST type-III、KINGBOLT F-specなど5モデル発売。  
KINGBOLT F-specは川村光太郎が好んだオカッパリロッドとして活躍。
- 2015 ● 橋本卓哉監修、初代BLACK JACKが登場。  
高評価を得続け、2026シーズンで実に3代目となる。
- 2016 ● 発表から10年を機にロッドがリブランディング。  
川村光太郎が心血を注ぐショアコンペティションシリーズがスタート。  
FIRE WOLF、SKYRAY [Power Plus]もリリース。
- 2018 ● 最新技術を凝縮し、感度や耐久性を極限まで追求した  
STEEZレーシングデザイン登場。
- 2019 ● ショアコンペティションシリーズのKING VIPERを発表。  
オカッパリの中・重量級ロッドとして話題に。
- 2021 ● フルモデルチェンジ。  
あらたなテクノロジーを纏い15モデルを一挙にリリース。
- 2022 ● FIRE WOLFがモデルチェンジ。  
現代のフィールドにあわせソリッドティップを纏い、装い新たに登場。
- 2023 ● 藤田京弥監修のSTEEZリアルコントロールを発表。  
初年度は4モデル発表。世界から注目される。
- 2024 ● STRATOFORTRESS 68を引っ提げ、  
ショアコンペティションに佐々木勝也が加わる。
- 2025 ● STEEZロッドとしては初となる2ピースモデル、  
FIRE WOLF、FIRE FLASHを発売。
- 2026 ● 5年ぶりにフルモデルチェンジ。  
新たに13アイテムが登場する。





Ultimate Bass Fishing Gear  
20th Anniversary





Toshinari Namiki

# 究極の現場、実釣能力の検証 「勝つために」始まったSTEEZ

Bass or Die…釣るか、さもなくば死か。STEEZロッドの根底に流れる、揺ぎなき精神。

STEEZが世に衝撃を与えたのはリールだけではなく。ロッドも同時に DAIWA 最高峰バスフィッシングブランド・STEEZの名を冠しての登場となった。今となってはルアーも同ブランドを掲げるトータルブランドとして知られるが、当時としては非常にレアケースでおそらく世界的に見ても前例のない試みだった。

STEEZ 発祥の2006年といえば、並木敏成は第2期の渡米で、FLW ツアーに参戦中のこと。前年の2005年は全6戦中の4戦でトップ5を獲得、年間成績2位を獲得した「T.NAMIKIのグレートイヤー」。その第3戦ワチタリバーでは見事に優勝。使用したプロットロッドは、翌年にワチタのサブネームを冠してリリースされたことは記憶に新しいところだ。

「ハリヤーの1ランク上のパワーを持つモデルで、メインパターンは、当時としてはまだ稀有だったPEラインを組んだレイタウンでのフリッピング。キャストビリティの高さはもちろん、アクションが付けやすく、何よりパワー負けしない1本だった」

そう、その頃は翌年のSTEEZバスロッド発表のため、数々のプロトを実戦で使い込んでいた。

究極の現場、トーナメントにおける実釣能力の検証。それは、まさに並木の座右の銘を象徴していた。

『BASS or DIE』。意識するなら『(バスを)釣るか、さもなくば死か』。

太平洋の向こう側、広大な大陸を転戦するサムライ。群雄割拠のFLW ツアーで孤軍奮闘する並木の姿は、世のアングラの心を打った。それは DAIWA 開発陣も例に漏れず、TEAM DAIWAの意志を継ぐ、次なる最高峰ブランドの名を並木にこう打診したのだった。

『BOD(読み:ボッド)』。

それは並木の座右の銘の略称だ。だが、並木は首を縦に振ることはなかった。

「俺のブランド。そんなイメージが強過ぎた。ましてや日本とアメリカを往復する日々の中で、すべてをひとりでこなすのには無理があった。今で呼ぶところの DAIWA WORKS メンバーが皆で作り上げていくのが筋ではないかと」

米国9ヶ月、日本3ヶ月。毎日のように湖上に浮いて、プラクティスから試合へと。終われば次の開催地まで1日1,000kmを超える移動も辞さない米国ツアートレイル。一方、国内では息をつく暇もなくメディア活動に加え、新たなタックルのテスト及びミーティングの日々が延々と続いていた。

## アクセシビリティを増す 代々継承のコードネーム

「今も昔も開発姿勢にそう変わりはない。飽くまでも世界基準のモノづくり。少なくとも自分の

場合は作ったものがそのままアメリカで使える。もちろん日本でも存分に使えるものを目指したことは言うまでもない」

程なくして、DAIWA から次なるブランド名の候補として上がったのが『STEEZ』。米国ではSTYLEのスラングとして使われる言葉で、文字通りスタイル、流派や姿勢などの意味を秘める。



STEEZ バスロッドの開発は、主にベイトモデルを並木が担当。初年度はラプター、トップガン、ブリッツ、フロッガー、ハリヤー、ワチタ、ストラトフォートレスの7本。

一方のスピニングは川口直人が担当。ヘルファイア、スカイフラッシュ、ルガー、キングボルト、グレイゴーストの5本だ。

「元々は自分が開発時に、バトラー時代からのコードネームを引き継ぐ方がイメージしやすいので使っていた。結果として、現代まで続くことになった」

その多くがTDバトラーから引き継ぐ戦闘機をイメージしたコードネーム。その名の継承は、先代



## Chapter 4

# 並木 敏成

からのユーザーもロッドの用途を想像しやすい。「その時代のベストを常に追求するDAIWA。その意味では、TD バトラーリミテッドは本当に衝撃だった。とにかく軽く、超感度。今なお感覚が忘れられないというアングラーも多い」

当時としては破格の高弾性・SVFコンパイルXをすべてのモデルに採用した。

「ただ撃ちと巻きのいずれにも採用するには無理があった。用途によって素材を使い分けるべきで、テクノロジーの適材適所化は必要だと」

並木は次世代ロッド・STEEZの開発条件を提案したのだった。

### BATTLER LTD からの脱却 適材適所の素材と製法へ

「例えばブリッツ。クランクベイトを始めとしたプラグングを完遂するには、先代の高弾性はマッチしない。どうしてもレギュラーテーパーに仕上げた低弾性のLM (LowModulus) が必要だった」

初期12機種はモデルそれぞれにテイストを合わせた。またSTEEZがユーザーに向けて画期的だったのは、採用されたマテリアルごとに異なるリールシートのカラーを採用したこと。シルバーはSVF グラファイト、レッドはSVF コンパイルX、ブラウンはLM、ブルーはUSTレイル。今なお、その差し色の伝統は続いている。

各部の詳細に目を向ければ、リールシートはエアビームコンストラクションを採用。中空の内部をブランクが貫通し、感度が向上。強度を存分に保った上で、薄肉ロープロ化。軽量化が間違いのない進化を遂げた。

またフォアグリップは極限まで肉をそぎ落としたショートフォア。「抜き上げ時はブランクに手を当てればいい」という並木のアイデアが活かされた。さらにこの軽量感ハングルハンドで

のキャストしやすさにも貢献したのは白眉だった。

また並木が手がけてきたモデルの中でも、最も広く知られているコードネームのひとつがハリアー。その初代から深掘りしていくとすればSTEEZの歴史が見えて来る。

### 時代と共に進化を遂げる 名竿・ハリアーの系譜

「元々は7ft.1in.のヘビーアクション。バトラー初年度にBA7011HFBを作り上げ、STEEZではその血筋を受けた06STEEZ7011HFB-SV、17年のリブランディングで7011H/MHFB-SVへ。21年の2代目STEEZではC610H-SVへと進化を遂げていった」

2000年当時はカバーをテキサスやジグでピッチンフリップンだけで攻めに行く竿の究極を目指した。国内では個体数に陰りが見えてきた頃だが、時と場所を選べばカバー撃ちだけで存分に釣果が得られた時代だ。

「遠くに投げなくても足下だけでいい。高弾性のアドバンテージ、軽さを活かして、長さを持たせた超感度竿に仕上がった。06ハリアーで気持ちマイルド化した感がある。それはバックスライドなど高比重ノーシンカーの撃ちものが求められ始めた時代に合った形」

一時はトーナメントレギュレーションの最長限ロッドとなる8ft.のハリアー80も登場。それまでと同様のカバー撃ちを求める際には、よりスペックアップしたモデルが担った。

「3代目の17モデルは、レンタルボートフィールドや陸っぱりでの使用も視野に入れて、6ft.10in.までショート化。それまではビッグベイトなど大型ルアーも守備範囲だったけど、15マシンガンキャスト3 691HMHFBが完成して、ハリアーは時代の流れを捉えたモデルに仕上げた」

そして今季26年、STEEZとしては4代目となる

『ハリアーC71MH+-SV』が誕生する。

「26モデルはマテリアルが明らかに1ランク上のものが登場する。まさに素材革命と言っていい。自分が求める理想に、技術が追いついてきた」

時代の変化と共に、竿へと求める矛先は変わり続ける。バーサタイル性もそのひとつ。基本のテーパーバランスは変わらず、常にブラッシュアップを遂げていく並木の竿。根底にあるのは時代時代に合わせた、飽くまでも実釣主義だ。「釣り味より釣果で示す、切れ味鋭い刀。状況に合わせて戦闘機でやつける、隙を与えない200%の竿作り」

かつてのTD バトラーリミテッドやSTEEZレーシングデザインを彷彿とさせる圧倒的な超感度が26STEEZの真骨頂だ。

「これが最終局面。そんな覚悟で作り込んだ」

感度を底上げしたのはトレグ®M46X、高弾性を維持しつつ強度を約20%高めた新たなカーボン繊維を採用。DAIWAはその繊維を極限までレジンを削減したプリプレグへと昇華して、SVF コンパイルXを始めとした最先端の製法で巻き上げた。何物も到達していない超感度の領域へと。

「千里眼？ 随分と控えめだね。万里眼でもいいくらいだよ」

フィールドの隅々までを見通せるかのような透き通った超感度を味わえる26STEEZ。そのトータルコンセプトは千里眼。仕上がったモデルを軽快に操作、鮮やかに獲物を仕留めるや、並木のジョークが冴え渡った。





## Chapter 5

# 赤羽 修弥

Shuya

# 前人未到・オールスター3連覇 時代を綴る“スカイレイ”の歴史

日々進化を続けたベイトフィネス。常に成長を諦めない、霞ヶ浦の鬼。

「DAIWAとの契約は、確か2006年だったかな。もう20年になるんだね」

意外に感じる方も多いが、実は赤羽修弥がDAIWAとフルスポンサー契約に至ったのは2006年のことだった。それ以前は長らくリールのみのサポートで、2006年STEEZ立ち上げに際してロッドの開発には携わっていない。「ロッドに携わり始めたのは、翌年2007年のことじゃなかったかな」

当時から霞ヶ浦を主戦場とするW.B.S.で華々しい戦績を誇っていた赤羽。STEEZで次なるテキサスリグやラバージグを始めとするワーミングロッドを生み出す際に、撃ちのスペシャリストとして白羽の矢が立ったのは自然な流れだった。「ハスラーが最初。俺が単独で監修したという印象ではなく、ロッドエンジニアと共に作り上げていった感じだね」

前項で並木敏成が語った通り、STEEZはDAIWA WORKSプロたちのノウハウを結集して作り上げるパスロッドとしてスタートを切った。最初期モデルはベイトが並木、スピニングを川口がそれぞれ担当。年を経るごとに、その道のスペシャリストが新たなSTEEZを作り上げていく流れとなっていく。

STEEZと関わり始めた翌年、赤羽に転機が訪れる。転機というより覚醒というべきだろうか。W.B.S.で年間優勝A.O.Y.の座を勝ち獲るや、

その年(2008年)の国内最大のトーナメント・オールスタークラシックへの出場権を獲得。本戦では件のハスラーを主軸としたテキサスリグを主軸に栄冠を勝ち獲ることに成功したのだ。折しも大会前日は大雨。それまで有効だったパターンが崩壊した一方で、増水により形成されたカバーが優勝のキーとなったのだ。

もはや語るまでもないが、この年以降の赤羽は破竹の勢いを魅せる。

『前人未踏のオールスタークラシック3連覇』

赤羽というプロアングラーを語る上で代名詞とも言えるのがこのフレーズ。今なおこの大記録を打ち破った者はいないことを付け加えておく。

## 代用品で凌いだ黎明期 ベイトフィネスの幕開け

オールスター3連覇の原動力。それはSTEEZで赤羽が作り上げた『スカイレイ』の存在があまりにも大きい。

その初号機となる11スカイレイは、ベイトフィネス黎明期の歴史を物語る1本だ。

2連覇を飾った2009年、赤羽がメインとしたのは霞ヶ浦の西浦最大級の流入河川・桜川。多くの選手がしのぎを削る中、赤羽の釣りの精度は群を抜いていた。

この時メインに使用したのは、TD バトラー

リミテッド631MLRB ハインドによるネコリグ。本湖でキッカーを得たのは、STEEZ 651MLRBブリッツによるシャッドだった。

「この頃、注目され始めていたのがベイトフィネスという新たな手法。ただ、軽いリグを精度高くベイトで攻略できる道具があまりにも少なかった」

ハインドは元々シャッドを始めとした巻き物を主軸とする1本。ターバーはスローながらも、TD バトラーリミテッド特有の優れた感度を持ち合わせていた。赤羽はそこに勝機を感じていたという。「ただ、カバーから抜けるときの抜け感があまりよくなかった。背負える重さの範囲も狭い。操作性の高い63という絶妙な長さ、その圧倒的な感度の高さは文句の付けようがなかったけど、それをベースにして沈み物をネコリグで釣る上で、精度の面でもうひと越えできるモデルが欲しかった」

組み合わせたリールは当時としては最軽量ルアーを投げることができたりベルトビクシー。こちらでもまたハインドと同じく巻き物のスモールブラッキング用だ。スプール径φ31mmでギア比は5.8、ハンドル1回転55cm。手返しの良い撃ちに適したモデルとは決して言えなかったという。「軽いものを投げることができるリールが他になかったんだ。ギア比も低い。ベイトフィネス専用が存在しなかった時代だね。フィールドも年々厳しさを増していって、1チャンスを絶対に逃せ



# Akabane



ない時代に突入していった。すると、代用品では  
どんどんダメなところが見えてきたんだ」

赤羽にとって2009年は「ミスなく、辛うじて」  
獲った2連覇目だったという。だが、この年、既に  
赤羽の新たなベイトフィネス竿の構想は進み、  
翌年へ向けて開花を控えていた。

## コンフィデンスの結晶 3連覇、舞台裏の真実

その2010年、2連覇のディフェンディング  
チャンプとしてオールスタークラシック出場。  
翌年のリリースを控えていた最終プロト複数  
本をデッキに寄せ、霞ヶ浦の湖上へと。初日は  
4位、やや出遅れるも2日目はトップウェイト  
を叩き出す。ウェイインショーの壇上、暫定  
チャンピオンシートで、ショーのラストを飾る  
プロアングラーを待つ。

現れたのは、奇しくも DAIWA WORKS の  
チームメイトである川口直人。ライブウェルから  
1本、2本、そして3本目を取り出すや手が止まる。  
5本のリミットには及ばない。この瞬間、赤羽の  
3連覇が決まった。  
「今回、DAIWA ロッドエンジニアがこの試合に  
勝つ為の最終プロトロッドを間に合わせてくれた。  
障害物周りで耐えていれば魚が出てきてくれる。  
このロッドがなければ獲れなかった魚がいた。  
間違いないこの魚が勝負を決めたと思う」

これは赤羽が実際に壇上で語った言葉だ。



ロッド自体がバスのファーストランを凌ぎ、  
ストラクチャーからバスを確実に浮かせるリフ  
ティングパワーを持つファステーパー。カバー  
周りで使用するラインとしては決して十分とは  
言えない8lb. を使用してもなお力余りあるト  
ータルバランス。プロアングラーとエンジニアの  
密なる関係が産み出した絶妙なテーパーが勝利  
を呼び込んだのだ。

ウイニングロッドの名は『STEEZ631MLFB-  
SV スカイレイ』。後に発表年度を冠する通称と  
して『11 スカイレイ』と呼ばれるモデルには、  
当時の最先端ベイトフィネスリール・PX68 が  
組み込まれていた。

## レジェンド戦・K.O.K 赤羽×STEEZ が完勝

あれから3年の時を経た2013年、真のベイト  
フィネス機・T3 AIR が誕生。スプール径はφ  
32mm、ギア比はそれまで主軸だった6.8は  
巻き物向けとなり、撃ちには8.6のエクストラ  
ハイギアが登場。ハンドル1回転86cmはベイト  
フィネスの世界を一変させた。何よりTウイング  
システムによるライン放出力は他に類を見ない  
軽快さだった。

「軽い物が投げられるようになった。手返しも  
存分。何不自由なく釣りができれば、ロッドに  
求める機能も変わっていく」

2016年、『681MLMFB-SV スカイレイ  
パワープラス』が登場。オリジナル誕生から  
5年後、STEEZ バスロッドリブランディングの  
年のことだ。スカイレイが沖めのストラクチャー  
やボトムを探る竿に対し、パワープラスはショア  
のカバー撃ちを主目的とした。

「カバーから引き剥がすパワーとレンジスがどう  
しても必要になった。それに、メインとするネコ  
リグも進化していった時代だった」

ストレートワームにチューブを巻きガード付き  
マス針をチョンがけする時代から、針先をワーム  
に埋め込んでカバーへの果敢な攻めを可能に  
するスナッグレスネコリグへ。フッキングと同時  
に針先を上あごに貫通させるパワー、掛ける  
ためのベリーが求められたのだ。

程なくして2代目スカイレイ構想も着々と進行  
していった。

「レンジスをより長くして障害物の高低差ある  
ものを抜けやすくした。例えばレイダウンとかね。  
長い分ひと巻き上げて抜け、フックセットにも  
マッチするバット。掛けるだけじゃない。投げ  
やすさ、取り込みやすさもそう。時代と共に竿へ  
の理想も変わっていく」

2022年に誕生したのが2代目スカイレイと  
なる『C68ML-SV スカイレイ68』。6ft.3in.  
から6ft.8in.へと進化すると共に、テーパーが  
よりマイルドになった。ファスト寄りからレギュラー  
寄りヘリファイン。またへの字テーパーで操作感  
もより向上した。

この年、歴代オールスタークラシック覇者を  
集めた世紀の大勝負・King Of Kings (キング  
オブキングス) が開催。ここでも赤羽は大いなる  
見せ場を作る。またしても2代目スカイレイプロト  
を勝利に貢献するウイニングロッドに輝かせた  
のだ。組み合わせたのは20STEEZ AIR TW。  
今なおベイトフィネスの最前線を走る名機だ。  
「マテリアルとテクノロジーの進化。それまで  
不可能だったことが上乗せされて、なお余りある  
状態になる。ひとことで言うならスカイレイの  
歴史は、進化の繰り返し」

2026年、22スカイレイのパワーアップ版と  
なる『C68ML+ -SV-BF スカイレイ68 パワー  
チューン』が誕生。

「STEEZ は自分を成長させてくれる存在。釣り  
人としてスキルアップできる」

“霞ヶ浦の鬼”は今なお成長を諦めることはない。



Daisuke Aoki

## Chapter 6

# 青木 大介

# リールから始まった厚き信頼は STEEZ GRANDEEという結晶へ

究極の感度、最先端の技術力。DAIWAが青木をまたさらに強くする。

24STEEZ SV TWを始めとするDAIWAリールと共に、第2の釣り人生を歩み始めた青木大介。国内復帰から即テストに参加し始め、1年を経て得た愛機への信頼はやがて結果として形を見せ始めていた。2024年にトップ50再昇格の一方で、参戦を続けたシリーズの1つ・マスターズでは24STEEZが第3戦生野銀山湖4位入賞の原動力となったのを始め、各戦で常にデッキに複数台が並んだ。



また、EXIST SFを始めとするスピニングはJB河口湖A第2戦優勝を始め、主戦力となった試合は数多い。リールで得た厚き信頼は、いつしかDAIWAと新たなロッドの開発にも取り組むことへと発展したのは、自然な流れだった。

だが、青木には自らが主宰するタックルメーカー「ディスタイル」に、自身が求めた釣法の粋を

注ぎ込んだディハイトなるフラッグシップが存在する。DAIWAと開発したロッドがリリースされれば、競合しかねないのではないかとそんな疑問も浮かぶ。

「DAIWAと深く関わっていくうちに、ロッド開発における最先端技術に興味を湧いた。今までディハイトで不可能だったことをDAIWAと組んだらどうなるのか。新たな可能性を試してみたかった」

競合の2文字は愚問だった。青木にとって、ストレスなく自在に操れる武器、結果として勝ちへと繋げる武器はブランドの垣根を越えるだけの価値があると踏んだのだ。「AGSの搭載を始め、バキッとしたブランクで優れた感度を求めるロッドにおいてDAIWAに勝てる企業はない。技術者が数多く、開発力に優れたDAIWAなら、今まで開発したことがないゼロベースで始める竿も、瞬間に具現化できるのではないかと」

その言葉通り、開発からわずか1年。2026年、青木のSTEEZが産声を上げることになった。

## わずかな期間で完成した “偉大なる青木の右腕”

青木はコードネームに「GRANDEE」の名を冠したSTEEZを2機種作り上げた。それは壮大

や偉大をイメージさせる英文字に、Daisukeのイニシャルが続くネーミングだ。

「『Feel ハスラー69』を作る着想を得たのは、08ハスラー。小池（貴幸）の竿を触った時に、俺の竿にフィーリングが似てるなど。現代のDAIWAのテクノロジーでもっと軽く、もっと感度が高まれば可能性は広がるはずだと」

今でこそSTEEZの様々なモデルに採用されている“へ”の字テーパーだが、その初採用は今から実に18年前のこと。ティップは先から曲がらず、一段下から曲がり始めすることでテキサス&ジグでの操作性を高め、ひとたびバイトを感知すれば瞬時の掛けを可能とするベリー〜バット。この優れたテーパーデザインをDAIWAの最先端技術で蘇らせたのだ。

「『Feel フィネスZERO』は水中の微かな変化をも感じ取れるソリッドティップモデル。元々、持ち重りがして感度を損ないがちなソリッドは好みじゃない。ところがAGSの採用とバキッとしたブランクに仕上げたことで、感度が高い上に操作性が高く理想のモデルに仕上がった」

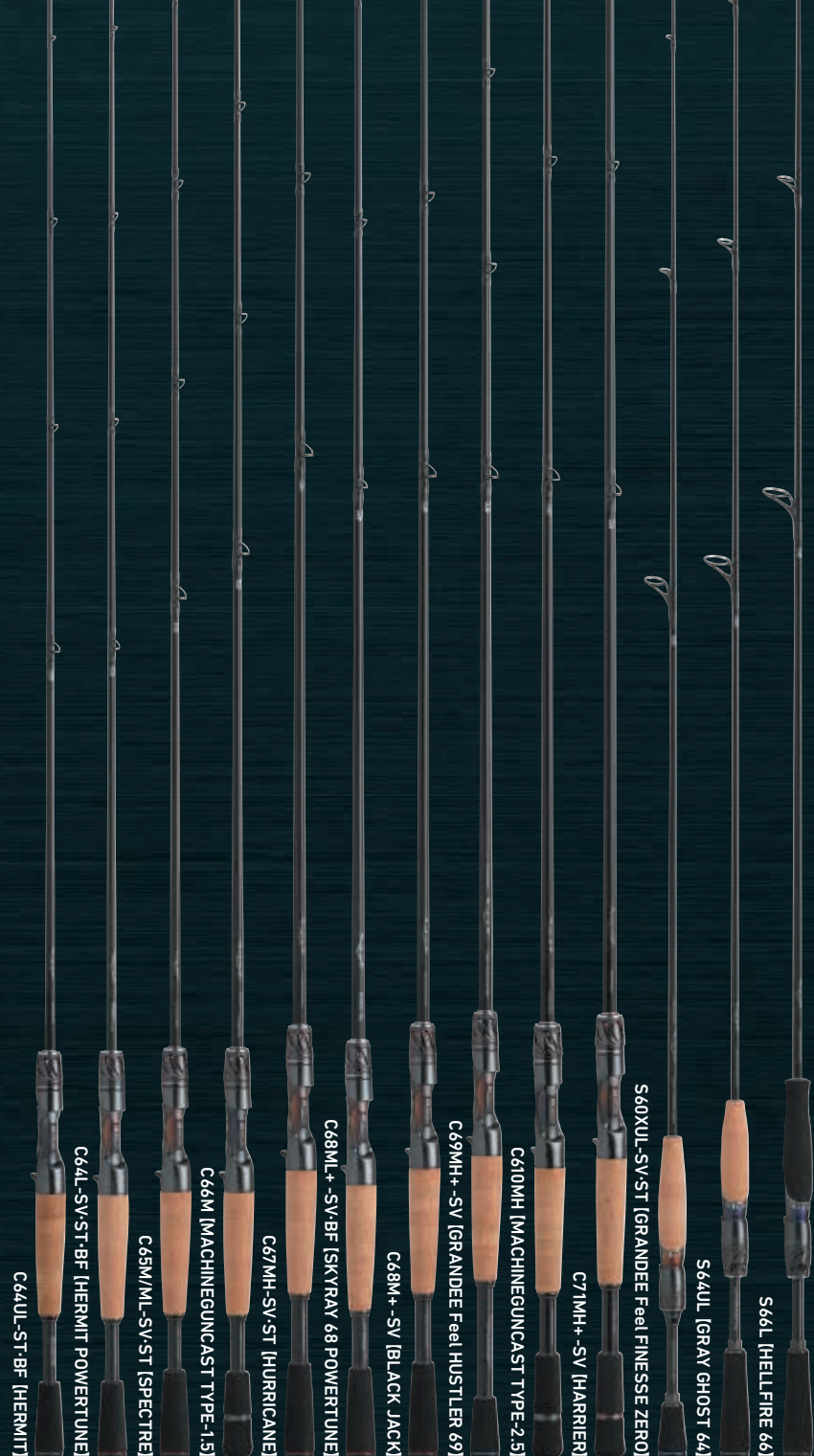
青木の想いはSTEEZのみに飽き足らず、DAIWA×ディスタイルとなるディハイトGRANDEE specなるプロジェクトも始動。DAIWAの技術協力によって、ディハイトの新たなモデルが2機種誕生した。ベイトのTHE SUTOとスピニングのRIKUがそれだ。





「SUTOは初めての試みで、ディスタイルだけでは作れない竿だった。DAIWAの技術力がどうしても必要だった。RIKUはその名の通り、バンクフィッシング用のパーサタイルスピニング。ディハイロには存在しないバリッとした味付けで仕上がった」

感度を求めたモデル、技術力を求めたモデル。こうしてリールから始まったDAIWAとの繋がりはロッドへと広がり、2025年11月に開催されたBASSER ALLSTAR CLASSICにて10年振りとなる自身3度目の優勝を遂げた。2026年、青木の武器がまたさらに層に厚みを増していく。



# STEEZ

品名	全長 (m)	継数 (本)	仕舞 (cm)	自重 (g)	先径/元径 (mm)	ルアー重量 (g)	ルアー重量 (oz.)	ライン (lb.)	ライン PE(号)	カーボン 含有率(%)	テーパー	価格 (¥)	JANコード
スティーズ (BAITCASTING MODEL)													
C64UL-ST-BF	1.93	2※	165	87	1.2/10.7	0.9~7	1/32~1/4	4~10	—	99	XF	88,000	3 644740*
C64L-SV-ST-BF	1.93	2※	165	87	1.2/10.7	1.8~11	1/16~3/8	5~12	—	99	XF	90,500	3 551437*
C65M/ML-SV-ST	1.96	2※	168	91	1.8/10.7	3.5~18	1/8~5/8	6~14	—	99	F ▶ S	91,500	3 551482*
C66M	1.98	2※	170	93	2.2/11.8	5~21	3/16~3/4	8~16	—	100	RF	86,000	3 551475*
C67MH-SV-ST	2.01	2※	171	96	1.5/12.8	7~42	1/4~1 1/2	10~20	—	99	XF	94,000	3 551505*
C68ML+-SV-BF	2.03	2※	175	91	1.8/12.8	4~18	1/7~5/8	6~14	—	100	F	90,500	3 551444*
C68M+-SV	2.03	2※	173	96	2.0/12.8	5~28	3/16~1	8~20	—	100	F	91,000	3 551499*
C69MH+-SV	2.06	2※	175	105	1.9/12.8	9~50	5/16~1 3/4	10~25	—	100	XF	92,000	3 551536*
C610MH	2.08	2※	178	108	2.4/13.4	7~56	1/4~2	12~25	MAX4	99	RF	87,500	3 551512*
C71MH+-SV	2.16	2※	185	110	2.5/13.4	9~50	5/16~1 3/4	10~25	—	100	F ▶ S	93,000	3 551543*
スティーズ (SPINNING MODEL)													
S60XUL-SV-ST	1.83	2※	163	68	0.6/9.4	0.3~2.7	1/96~3/32	1~3	MAX0.3	99	XF	89,000	3 551550*
S64UL	1.93	2※	170	73	1.4/8.9	0.45~3.5	1/64~1/8	1.5~4	MAX0.8	100	F	85,000	3 551581*
S66L	1.98	2※	173	82	1.5/9.9	0.9~7	1/32~1/4	2.5~6	MAX1.0	100	F	86,000	3 551574*

◎赤文字は新製品です。 ※グリップジョイント仕様です。 ※C64UL-ST-BFの画像はプロトタイプです。



## Chapter 7

# 藤田 京弥

Kyoya Fujita

## 「釣りが楽しくなる竿。 その想いは変わらない」

B.A.S.S. トップカテゴリー日本人最高位。快挙を打ち立てた男が語る、RCの本質。

「トーナメントはバスフィッシングの究極の現場。選手全員でブラックバスの生態を検証し合っている場なんです」

2025年のBASSMASTERエリートツアーを終え、一時帰国したばかりの藤田京弥はこう語り始めた。

3シーズン目のツアーを終え、年間成績は頂点を目前にした3位。エリートでの自身最高位にして、太平洋を渡った歴代B.A.S.S. トップカテゴリー日本人選手としても史上最高位の快挙。全米最高峰、いや世界最高峰の舞台で戦えるツアープロがそこにいる。

冒頭の言葉はそんな藤田に「トーナメントとは何か」と訊いた時の回答だ。「日本とアメリカ、陸か艇か。場所や手段の違いが多少あったとしても、釣りの本質は何も変わらない。どれも同じバスフィッシング。私はそう思う」

自身を研ぎ澄まし、極め続けた結果、トーナメントに行き着いただけ。そう藤田は言う。「時として試合は、他と同じ釣りじゃ勝てないこともある。だから特殊な釣りと思われがちだけど、根本的に一緒。釣りは釣り」

藤田が手がけるロッドは2022年にスタートした『STEEZ Real Control』（以下、RC）。

キャスト、アクション、フッキング、ファイト。全てにおいて真の操縦性、即ち藤田の理想と

する性能を極限まで求めたロッド。今や世界を相手に戦う藤田が手がける以上、“釣り勝ためのロッド”と表現されても何ら不思議ではない。「それはあくまでもメディアの考え方。私が求めているのはそこだけじゃない。試合はあくまでも一部。信頼して使える道具を常に追い求め続けている」

### 「理想を実現したロッド。 この感動を世に伝えたい」

「バスフィッシングは、魚を釣る以前の動作が重要で、竿に求められる要素が多い。1日の中で1匹の魚が口を使う瞬間より、キャストやアクションさせる時間の方が断然長い」

藤田は自身の技術をより高める竿を作り上げる一方で、こんな理想を込めていた。「フッキングやファイト、もちろん食ってからも面白さを求められるが、そこに至るのはそれ以前が整ってからの話。キャスト、アクション、そこにつながる操作性で思い通りにできることが大切だと思う」

DAIWA バスフィッシングの最高峰STEEZの名を冠するRC。使い手を選ばず、その裾野は実に幅広く想定している。

「一番求めているのは、誰が使っても釣りが楽しくなるロッド。RCに触れば、今までボンヤリ

していたことがクリアに明確にイメージできる。すると思ひ通りにルアーが動かせる。そこから楽しい釣りの世界が始まる」

自分の理想を形にする。そして誰も感じたことのない良い竿ができた。ならば皆にその感動を伝えたい、RCの世界を味わって欲しい。藤田の素直な欲求だ。



「その想いは昔から強かった。最初からその想いで続けてきた。そこは何も変わらない。ボトムをズル引きしたり、ルアーを操作するだけでも楽しい。それほど高い感度もある。自分のノウハウにDAIWAのテクノロジーと技術力が加わった。どんなに優れたテクノロジーがあっても開発者の力がなければ良いものは





できない」

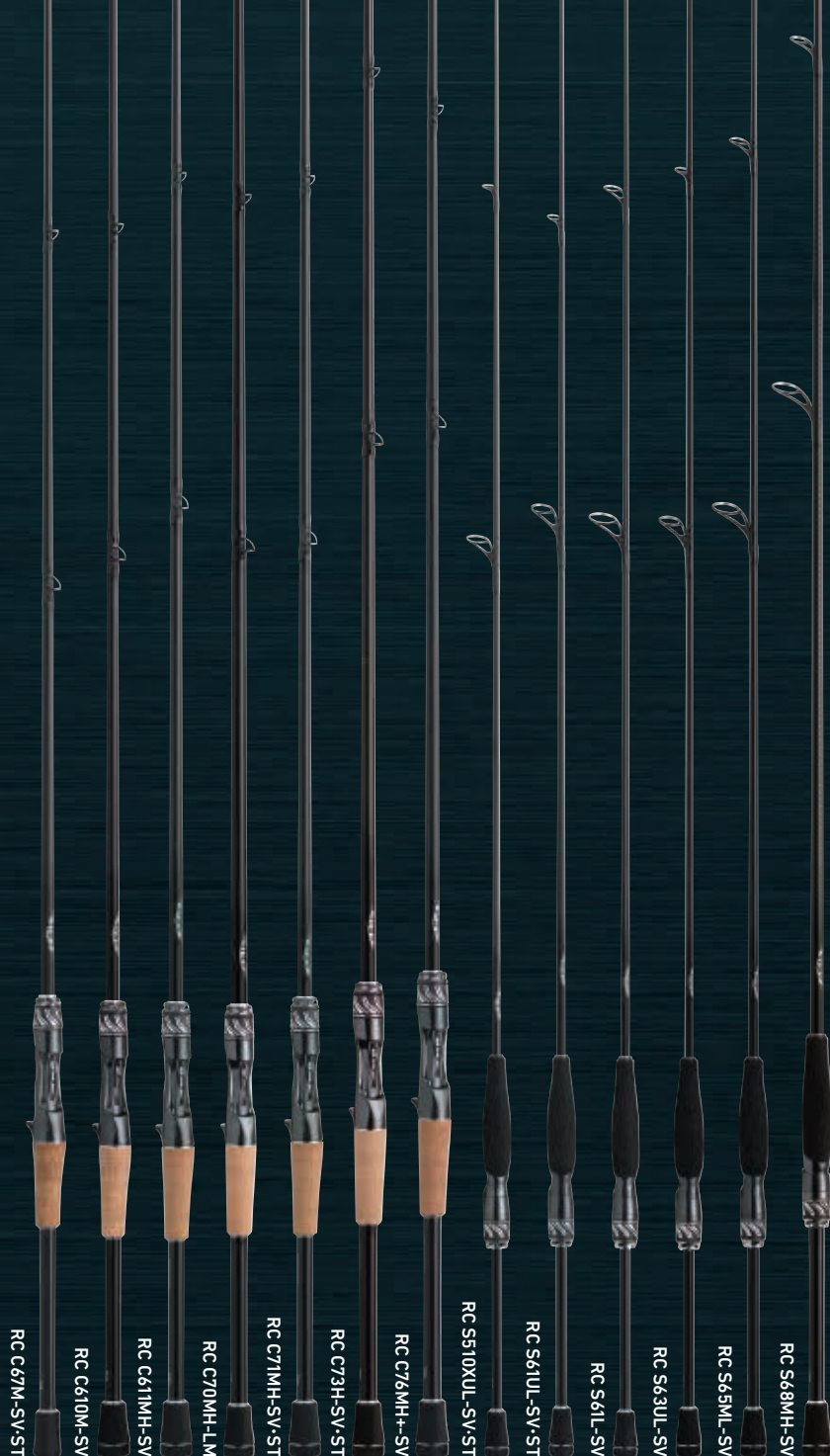
2026年、RCの新作は2本。C76MH+-SVと67M-SV-ST。前者はヘビー級バーサタイルとして、既存610MのHeavy版。後者は、73Hや71MHのパワーダウン版でRCソリッドティップベイトの最もパワーランクを下げたモデルだ。

それぞれが何を使う竿なのか。竿にルアーを決め込まないのがRCの流儀だ。「610Mはバーサタイルと言われるが、それだけじゃない。RCのすべてのモデルがそう。ごく細かな用途が限られる竿はなく、使えるルアーの幅が広い。RCはパワー別に長さを選ぶ竿。すべてを揃えたら現代のバスフィッシングが完成する」

2025年は、求めているタックルが充実したことが自信に繋がり、自己最高位にも貢献。「ミスが減った。ルアーが思い通りに操作できるし、フッキングもファイトも理想の追従性。そこが僕の進化でもある。現行RCだけで、試合のすべての魚を釣った」

2キロに迫る魚を掛けるや瞬時に足下まで寄せ、抜き上げざまに笑顔を見せる藤田の姿はワールドワイドに駆け巡った。藤田とRCが世界を動かした瞬間だった。

藤田が言う「釣りが楽しくなる竿」を象徴するシーンのひとつ。それがReal Controlの本質だ。



## STEEZ Real Control

品名	全長 (m)	穂数 (本)	仕舞 (cm)	自重 (g)	先径/元径 (mm)	ルアー重量 (g)	ルアー重量 (oz.)	ライン (lb.)	ライン PE(号)	カーボン 含有率(%)	テーパー	価格 (¥)	JANコード
スティーズ リアルコントロール (BAITCASTING MODEL)													
<b>C67M-SV-ST</b>	2.01	2※	171	81	1.3/12.9	5~21	3/16~3/4	8~16	MAX2	99	XF	90,500	<b>3 434136*</b>
C610M-SV	2.08	2※	178	85	1.7/12.9	5~21	3/16~3/4	8~16	MAX3	100	F	89,000	3 362101*
C611MH-SV	2.11	2※	181	91	1.8/12.9	7~28	1/4~1	10~20	MAX4	100	F	91,000	3 340376*
C70MH-LM	2.13	2※	183	95	2.0/14.9	7~28	1/4~1	10~20	MAX4	99	F	90,000	3 418778*
C71MH-SV-ST	2.16	2※	185	102	1.4/14.4	7~28	1/4~1	10~20	MAX3	99	XF	92,500	3 434143*
C73H-SV-ST	2.21	2※	190	107	1.6/14.4	11~42	3/8~1 1/2	12~25	MAX4	99	XF	93,000	3 305061*
<b>C76MH+-SV</b>	2.29	2※	198	104	1.7/14.4	9~42	5/16~1 1/2	12~25	MAX4	100	F	94,000	<b>3 544804*</b>
スティーズ リアルコントロール (SPINNING MODEL)													
S510XUL-SV-ST	1.78	2※	152	50	0.8/8.4	0.3~2.7	1/96~3/32	1~3	0.15~0.4	99	XF	86,000	3 305078*
S61UL-SV-ST	1.85	2※	159	52	0.8/8.9	0.45~3.5	1/64~1/8	1.5~4	0.15~0.6	99	F	88,000	3 340390*
S61L-SV	1.85	2※	159	57	1.3/8.9	0.9~7	1/32~1/4	2.5~6	0.2~1	100	R	86,000	3 305085*
S63UL-SV	1.91	2※	165	56	1.3/8.9	0.45~3.5	1/64~1/8	1.5~4	0.15~0.8	100	R	86,000	3 401374*
S65ML-SV	1.96	2※	170	61	1.4/9.9	1.8~11	1/16~3/8	4~8	0.4~1.2	100	F	87,500	3 340383*
S68MH-SV	2.03	2※	177	84	1.7/12.4	3.5~21	1/8~3/4	8~20	0.6~2.0	100	F	89,000	3 305092*

◎赤字は新製品です。 ※グリップジョイント仕様です。





Kotaro Kawamura

# 時代の今を見つめ続ける “真のバーサタイル”

陸の競技を極めし者が求めた6本。ショアコンペティション、10年間の足跡。

「バーサタイルロッドという言葉はある時から存在していた。しかし、“真のバーサタイル”は存在していなかったのも事実だった」

Versatile。それは多用途や多彩、また万能の意味を持つ英単語。バスフィッシングの世界、それもロッド界では、いつしかそれが一人歩きするようになった。川村光太郎はそう語り始めた。「あらゆるルアーが使えるのかもしれない。しかし、それは単に巻きも撃ちも含めた全ての釣りの真ん中を突いただけのものであって、どのルアーを使うにしても及第点に及ばない。それでは僕が大事にしている競技の世界では通用しない」



川村は今から18年前にスタートした陸王の初代王者にして、現在に至るまでに史上最多となる5度のタイトルホルダーに君臨。今なお陸の競技界で最前線を走り続けている。

そんな川村が手がけるバスロッドシリーズ「STEEZ Shore Competition」が産声をあげたのは今から10年前、2016年のことだ。「あの頃求めていたのは1本で僕の釣りが何でも

できる竿。当時の陸王は、竿1本ルールだった」

2日間の公式プラクティスを経て、戦略を絞り込む。撃ちか巻きか、それともフィネスか。タックルを入念に選抜しても、突然のフィールド変化に直面すればもう後戻りはできない。どんな状況に陥っても幅広いルアーが使える竿、釣り勝てる竿の開発は、川村にとって急務だった。

当時、川村にとって最大の戦力だったのがスナッグレスネコリグ。そしてここ一番でのスモラバ。時にスピナーベイト、時に中型ハードベイトまで登板する機会もあった。

「対戦で使うルアーの数々を考えると、ベイトフィネスという選択肢に行き着いた。それが自分にとって、真のバーサタイルとなる可能性がある」と

川村光太郎×ベイトフィネス＝真のバーサタイル。これがSTEEZショアコンペティションの始まりだった。

## 革命機SVに頼らない 本当の1本を求めて

2010年代前半、川村が最も多用していたロッドがブラックレーベルBL PF701MFB。本来は撃ち物を目的とした1本だが、使い込んでいくうちに可能性が広がっていった。「当時の僕がバーサタイルと言えた唯一の竿。MediumパワーでF(ファスト)テーパーを意味

するMFBだが、バットにはMHの強さがあった。カバーゲームはもちろん、投げた先でのフッキングも決まり、プラグさえも使えた」

この1本が川村の主軸となり得たのは、2013年に「STEEZ SV」という新たな武器が登場したためだ。初代STEEZに、替えのSVスプールへと換装すればより軽いルアーさえもスムーズに扱えたのだ。

「ただ竿は軽いとは言えなかった。STEEZだからこそ採用できるSVFコンパイルXを使えたら、どんな竿ができるのか非常に興味を湧いた」

真のバーサタイルロッドへと向けた明るい未来を予感させた。だが、意外にも開発は難航した。SVFコンパイルXの軽さと高感度、そして高反発を、それまで使い込んできたBLPFのテーパーに落とし込むと、求めていた理想から徐々に遠のいていったのだ。

「下まで曲がるテーパーにして、軽いものや巻き物にも使えるようにもしたい。一方で、その頃は撃ち物がよく釣れていた時代で、それまで以上に足下のカバーフィッシングがメインになった。テーパーを寝かせると、カバーでのフッキングパワーが落ちる。FテーパーかRテーパーか。その匙加減はどこなのか…」

理想にマッチする1本が仕上がらない。迫る納期。とはいえ、イメージと完全に重なるモデルを作り上げることは川村の使命。納得のいく





## Chapter 8

# 川村 光大郎

1本を作り上げることに専念し続けた。  
「今思えば、当時はロッド開発の知識が浅く、イメージがあってもエンジニアへの伝え方が未熟だった。SC各モデルの開発が進んでいくと、DAIWAの技術力も格段に上がっていく。同時にフィールドも刻々と変化し始めていった」

2016年、SC6111M/MHRB 初代ファイアウルフが完成。足下のカバーにおけるマイクロピッチ局地戦が主力だった時代を象徴する1本だが、いつしか個体数の減少に伴い攻略範囲を広げることが主だった展開となっていく。「次なるモデルの構想がまとまっていく。レングスは取り回し良い6ft.9in.へ。Rテーパーをより深くしてキャスト精度を向上。レンタルボートでも使いやすい。5年を経て新たな要望が出てきた。SCは必然性のあるモデルチェンジしかない」

2022年、いよいよ2代目『ファイアウルフ SC 669M+-ST』が産声を上げるようになった。

### 「新素材前提の開発はない。不用意にモデルチェンジしない」

「4年経った今でも全く不満がない。2代目ファイアウルフで僕の求めるものに完全にハマった。新たな要望はない。それは軽い悩みでもある」

22ファイアウルフは最も使用頻度の高いバーサタイルにしてラフに扱うことが多いにも関わらず、強度に何ら不安がない。優れた使用感と共に、今なお絶大な信頼を置く1本だ。「ただ、DAIWAの技術力は日々進化している。不用意なモデルチェンジはしたくない自分がいる一方で、新たに試せることは増えていく。1本1本の適性をみたと、SCがより良くなる可能性を探ってみたい」

今季2026年に登場の『SCライトニング64 C64ML+-LM』がまさにその好例だ。

2021年に登場した初代SCライトニング66

C66ML-GはSVFグラスを用いたソフトティップを採用して、クランクやシャッドクランクなど、ハードベイトの中でも使用頻度高いルアーのために開発したモデル。だが、時代の変化はリニューアル構想へと川村の背中を押した。「ただ巻き系が釣れにくく、出番が減りつつあった。バーサタイルを求めるSCでありながら出番が減ったルアーを重視するのは本末転倒。SCの1本という役割の中で最大限の汎用性を持つコンセプトから外れてしまっていた」

現代の戦力となり得るポッパーやジャークベイトへの対応力、ワイヤーベイトでのキャストビリティやフッキングパワーをより重視。ただ巻き系への対応力も可能な限り扱える範疇に仕上げた。「メイン素材は低弾性カーボン・LowModulus。細身肉厚のブランクに仕上げ、根元にはトレカ<sup>®</sup>M46Xを採用。低弾性LMで損なわれる張りを、高感度高反発の新素材で根元を補強できた」

6ft.4in.。初代から2in.のショート化へ。「下方向ヘジャークしやすく、水面を叩かない。ただ巻き系にしても存分に操作性は格段に向上。両立できるバランスに仕上がった」

またカーボンガイドAGS、同じくカーボンスレッドCWSも採用へと至った。

「開発途中まで中弾性+チタンSICが第一候補だったが、最終的には低弾性+AGSへ。キャストフィールに難があった低弾性も、軽いガイド・AGSによって曲がっても戻りが早くなる。テイクバックからルアーを送り出してくれる感覚が向上した」

可能性は探り続ける。「もう少しこうしたい」の限界を見付ける旅。それがSCの開発姿勢だ。

### 可能性の追求、限界への挑戦 遠回りが導いた本当の1本

プロトサンプルを絞り込んでいく作業は5本から1本を選抜。そこからバージョン違いを5本、

そして1本を選抜。この繰り返しが続く。

「竿作りに計算式があったとしても、実際に物を作らないと判断できない。求めた1本が仕上がったら、その周辺も探る。そうすることで1点を絞れる。バージョン違いが少し良くなることもあれば、悪くなることもある。そこで1点が見定まる」

通常プロトは、テクノロジーや情報の流出を防ぐため、テストが終われば回収されるものだ。しかし、川村はテスト1日では完全に判断できないことを訴えた。

「陸王でもテストサンプルを使ってきた。攻めて攻めて攻め上げてこそ見えてくることもある。そこを次にフィードバックできる」

2020秋、大江川・五三川で行われた陸王決勝では、川村の右腕には翌年に発売を予定する21ファイアフラッシュS64L-SV-STプロト。ライトキャロやダウンショットを駆使して川村は栄冠を獲得することに成功した。



「SCがこれまでに多くの方に支持されて、2巡目からより独立した立ち位置になった。ブランクだけではなく、当初は難しいと言われた1本ごとのカラー分けも可能になった」

陸は無論、竿数を制限されるレンタルボートでの釣り。ひと目で持ち替えることができるのは大きなメリットになる。例えば、ボイルの瞬間はこの一瞬の差が明暗を分ける。

川村はSCの6本にそれぞれが可能な限りの幅、可能な限りの汎用性を込める。そのこだわりの開発姿勢は、ふたりめのショアコンペティター、佐々木勝也にも受け継がれたのは必然だった。



## Chapter 9

# 佐々木 勝也

Katsuya Sasaki

# DAIWA 陸魂を継承する もうひとりのショアコンペティター

時代を反映する両極の武器“剛と柔”。情熱が突き動かし続けるSCの未来。

「3年前、2022年の年末、SCの開発陣に加えたらどうかと私から提案した」

こう語り始めたのはSTEEZショアコンペティション(=SC)を立ち上げた川村光太郎。自らが陸の競技で求める全5モデル(後の2025年に全6モデルとなる)が揃い、一応の完結を見せたタイミングで、新たな方向へ視野を向けたのだった。

「佐々木勝也、今では霞ヶ浦水系で絶大な支持を受ける存在。彼と知りあって親交を深めていくうちに、彼は陸王、SCのイメージにピッタリだと。釣りたい、釣り勝ちたい気持ちが非常に強い男だと」

誰よりも勝負に対して食欲。また同水系で真剣にロクマルを追い求めている数少ないひとりでもある。その情熱は川村を動かした。「もうひとつ、彼は僕と釣りのスタイルが違う。ど真ん中を狙う僕とは異なって、両極端。ヘビー級ベイトか、フィネス系スピニングか。僕の中にはないアイデアでショアコンペティションを充実させてくれるのではないかと」

バスフィッシングの軸足を捉えた川村の6本。加えて、その隙間を縫うかのように佐々木が求める“剛と柔”のモデルが加わる。「陸でビッグベイトで釣りたい人は多いと思う。そんな竿の誕生を心待ちにしている人は必ずいる。(佐々木)勝也なら、できる」

2024年、ショアコンペティションに加入した佐々木勝也が初プロデュースしたのが『ストラトフォートレス68』。SC始動8年目、新体制が動き出した。

## PEスピニングが超進化 佐々木の“柔”が完遂

「光太郎さんからお話をいただいた時、かなり身の引き締まる想いでした。陸の競技で釣り勝つために作ってきたパーサタイルロッドの究極であり、世で広く厚く支持されてきたSC。いざ自分が関わるとなると強いプレッシャーを感じた一方で、緊張感も高まりました。100%納得いくものを作りたい。ヌルい竿は絶対に作れないと」

前段で川村が語った通り、佐々木は“剛と柔”、両極端なロッドを主戦力として久しい。過去にはクロノスやブレイゾン、そしてリベリオンと年を経るごとに右腕をアップグレードしてきたDAIWA生え抜きのアングラー。2本のロッドはグレートを替えても求める機能の根幹は不変。“剛”の1本、いわばビッグベイトロッドの理想はおぼろげながらも着想していたという。開発スタートから1年を経て、佐々木の理想を実現した『ストラトフォートレス68 C68H-ST・SB』が発表されたのは記憶に新しいところだ。

もう一方の“柔”を満たすスピニングは今季2026年、『SC S69UL キングボルトフィネススベック69』の名で世に姿を現す。「僕の釣りを知っている方ならULの表記に違和感を覚えると思います」

かつて佐々木が右腕としていたモデルは、リベリオン6101MLFS。これはMLのファステーパースピニング。MLからUL、それは大幅にパワーランクを下けたことになる。「以前より軽いルアーを使うことが多くなった。パワーランクを下けた方がそれを実現できる。柔らかいほど重いルアーが使えないのはセオリーでも、竿を柔らかくして重いものを投げたい。MLで作りはじめ、もう少しもう少しと柔らかくしていった結果のUL」

驚くべきはその適合ルアー重量、0.45~7g。通常ULであれば、上限は3.5g程度までだ。「ガラスの竿って表記以上のルアーを投げることができませんよね。それと同様の原理を利用したのがこの竿。ペリー〜バットが柔らかく、ティップが硬いフルチューブラー。そこにフロロではなくPE0.6~0.8号を組み合わせることで機能する竿が仕上がりました」

表記こそULだが、MLと同様の機能。そこにDAIWAのロッド設計のマジック、日々進化を続けるDAIWAの技術力がある。「僕が使ってきたスピニングロッドの中で最高の





ものが仕上がった。先が硬いから操作感が出る、操作性を手元に伝えてくれる。軽量のAGSは操作性を妨げず、シャープなキャストにも貢献してくれる」



使えるルアーはもはや無限。自身が開発したシュリンビードのノーシンカーに始まり、クアッドフォーゼの各リグやネコストレートロングのネコリグ、小型ハードベイトなど枚挙にいとまがない。「1本で何でもやりたい。光太郎さんが育ててきたSCの伝統を継承できた。年々難易度が上がっていくフィールド。時代に合わせた竿、陸の最先端ロッドであることを肝に銘じて、一番の竿でなくてはいけない。これからもその名に恥じない竿作りを心がけます。期待していただければ幸いです！」



## STEEZ Shore Competition

品名	全長 (m)	継数 (本)	仕舞 (cm)	自重 (g)	先径/元径 (mm)	ルアー重量 (g)	ルアー重量 (oz.)	ライン (lb.)	ライン PE(号)	カーボン 含有率(%)	テーパー	価格 (¥)	JANコード
スティーズ ショアコンペティション (BAITCASTING MODEL)													
SC C64ML+ -LM	1.93	2※	165	119	2.2/11.6	4~28	1/7~1	6~14	—	99	RF	88,000	3 551451*
SC C66ML-G	1.98	2※	170	111	1.9/14.9	3.5~21	1/8~3/4	6~14	—	64	F	63,500	3 066597*
SC C66M/ML-SV-ST	1.98	2※	170	109	1.6/10.9	3.5~18	1/8~5/8	6~14	—	100	XF+S	83,000	3 340345*
SC C68H-ST-SB	2.03	2※	171	114	2.2/14.9	11~113	3/8~4	14~30	MAX5	99	F	71,500	3 340338*
SC C69M+ -ST	2.06	2※	176	112	2.0/12.9	5~28	3/16~1	8~20	—	99	RF	73,000	3 066733*
SC C69M+ -2-ST	2.06	2	107	115	2.0/12.9	5~28	3/16~1	8~20	—	99	RF	75,000	3 455308*
SC C69MH	2.06	2※	174	110	2.4/12.9	7~84	1/4~3	12~25	MAX4	100	R+S	71,500	3 254406*
スティーズ ショアコンペティション (SPINNING MODEL)													
SC S62UL-SV-ST-AGS	1.88	2※	165	68	1.1/10.4	0.45~3.5	1/64~1/8	1.5~4	0.15~0.8	99	XF+R	88,000	3 442070*
SC S64L-SV-ST	1.93	2※	169	95	1.5/10.4	0.9~7	1/32~1/4	2.5~6	—	99	F	76,500	3 066757*
SC S64L-2-SV-ST	1.93	2	100	96	1.5/10.4	0.9~7	1/32~1/4	2.5~6	—	99	F	78,500	3 455315*
SC S69UL	2.06	2※	178	77	1.5/9.9	0.45~7	1/64~1/4	1.5~4	MAX0.8	100	F	85,500	3 551604*

◎赤文字は新製品です。 ※グリップジョイント仕様です。 ※SC C64ML+ -LMの画像はプロトタイプです。



# STEEZ

## Lure

### CHRONICLE

- 2016 ● 10周年を機にSTEEZルアー始動。  
ハードベイトを中心に展開し“STEEZ”はファミリーブランドとして磐石を目指す。  
業界初のガード付きブレッドジグ、STEEZ COVER CHATTERリリース。
- 2017 ● STEEZ FROG、あらたに3種追加。  
FECO認定でJB/NBCトーナメントで使える数少ないフロッグとして各地で活躍。
- 2018 ● 水端み抜群リブのSTEEZ HOGをはじめ、ワーム展開がスタート。  
STEEZ SPINNERBAIT登場。
- 2019 ● ネコリグの定番ワーム、ネコストレートが“STEEZ”の冠を纏い登場。  
その他、ハードルアー&ワームがあらたに16アイテム追加。
- 2020 ● 泉和摩監修「CJSシステム」搭載のSTEEZ FLEX JIGが誕生。  
ワンタッチでフック交換が可能な画期的ジョイントジグ。
- 2021 ● ミノの伝道師、泉和摩がDAIWAにて  
HMKL MINNOW -STEEZ CUSTOM-を手掛ける。  
また、沈むフロッグが水面直下を攻略するSTEEZ SNAPPY FROG登場。
- 2022 ● STEEZ PROP 70F/S、STEEZ PENCIL 86F、  
STEEZ CRANK700やSTEEZ STIRRING SHAD4.3"など、  
ビッグレイクガイドの長谷川、三宅、小島を中心としたルアーが充実。
- 2023 ● 2016年発売のSTEEZ CRANKがモデルチェンジ。  
あらたにSTEEZ CRANK200、350、500をリリース。  
また、STEEZ BULL FROGやSTEEZ PROP 170F/Sのビッグルアーが登場。
- 2024 ● タフコンディションを乗り切るエビ系高比重ワーム、STEEZ BRAMO 1.7を発売。  
また“STEEZ”初となるメタルバイブ、STEEZ METAL VIB登場。
- 2025 ● STEEZ NEKO STRAIGHT、STEEZ CRAW、  
STEEZ SQUARE 100がモデルチェンジ。  
宮嶋駿介監修の唯一無二のジョイント構造が生み出す新感覚表層系ルアー  
STEEZ CRANPO 81Fも発売。
- 2026 ● STEEZルアーの記念すべき10周年、  
さらに磨きかけた“実釣至上主義”ルアーの数々がリリース。





Ultimate Bass Fishing Gear  
20th Anniversary



## Chapter 10

# 泉 和摩

Kazuma Izumi

## 「ルアーは結果がすべて。 先が見えないから面白い」

STEEZ20周年を凌ぐ、DAIWA 歴35周年。国内バスフィッシングの父、かく語りき。

1997年3月ワールドプロシリーズ初年度開幕戦、舞台は兵庫・生野銀山湖。現代にも続くJBトップカテゴリー・トップ50の前身が開幕したのは今から28年前のことだった。

また肌寒い早春、多くの選手が上流域に集中するなか、ガラ空きの中流域に陣取る選手がいた。狙っていたのは中層3〜4mライン。ミノーをドラッグングで狙いの層まで到達させた後、ジャックで誘う戦略。TDミノーやシルバークリークシャッドなど数々のサスペンドミノーをローテして仕留めていく中で、主力となったのは自身が手がけたHMKLミノーのワンオフ。



日に日にプレッシャーは高まり、ウェイトのアップダウンも激しい上流域。対して、ビッグウェイトこそ難しいが、上流へと向かう段階の個体を連日安定して仕留めることができた中流域。軍配は後者に上がった。

記念すべきJBトップカテゴリー開幕戦の勝者は、泉和摩41歳。伝説の始まりだった。

Hand Made Kazuma's Lure。世では既にHMKLの名は広く知られていたが、その意表をついた釣りは当時のバス界を沸かせた。その釣り方は後に隆盛するヒュンヒュンの礎ともなったことは今でこそ語れる事実だ。

### 渡米組のパイオニア、 後続へと道を切り拓く

「今回、『新しいミノーを作りたい』というお話をいただいて、私は長年DAIWAさんにお世話になってきたもので断る理由もない。むしろ挑戦してみたい気持ちが強かったですね。契約ですか？ アメリカから帰ってきた年ですから、1991年だったと思います」

STEEZは今年20周年を迎えるが、DAIWAと泉の密なる関係はその倍の期間に近く、実に35年となる。

1986年、JBトーナメントの前身・全日本バスプロトーナメントで初代A.O.Y.を獲得した翌年、バスフィッシングの本場・米国のB.A.S.S.へ日本代表として泉を含む数名の選手が派遣。初めての米国、奇しくも釣りの舞台はとあるスモールマウスレイク。見たこともない種、見たこともないサイズが果敢にミノーを襲い、ラージ

マウスを凌ぐ瞬発力のあるファイト。おそらく日本人で初めてスモールマウスを釣った人物だ。「何もかもが楽しかったんですね、アメリカは。そのまま住んじゃいましたよ、4年間。1974年から日本でもハンドメイドでミノーを作っていました、向こうでも作りながら試合に出ていましたね」

ポップ-R 泉バージョンはあまりにも有名。泉の技術に感銘を受けた当時のトッププロ、ゼル・ローランドが自身のルアーにチューニングを依頼。幾度もの勝利に貢献したことで広く知られ、現地からのオーダーは殺到。日本発信のルアーでいち早く米国で知られたのはHMKLだったのかもしれない。

「ある時、US DAIWAのスタッフ、小野(俊郎)さんたちとテキサスのレイクフォークで一緒に釣りしたことがあったんですよ。ジウジャーロデザインのTEAM DAIWA (1989年発売)を使わせてもらって、それが私にとって剛性が高いと感じた初めてのベイトリールでした。すごいねー、よく飛ぶねー、と感動したこともよく覚えています」

TD1 Hi Tournament。ブラックボディにゴールドの差し色が入った革命機。以降、カラーを変えた同モデルのシリーズに続き、TD-S、TD-X、TD-Z。そして2006年のSTEEZへ。「1991年から現在までの中で20年間。STEEZ





は僕のバスフィッシング人生そのものですね」

ロッドとリール、そしてルアーへ。泉とSTEEZの密な関係はさらに深まる。

## ハンドメイドの濃密経験値、インジェクションへ全集中

ハンドメイドからプラスチックのインジェクション成型。過去にはHMKLとしてK-1やジョーダンなど数々の名作を生み出してきた歴史がある。「DAIWAさんとやるなら、ただ作るだけでは面白くない。前々から私が思っていたのは、ミノーをより遠くへ飛ばすこと。重心移動がキーになるだろうなと。かつてHMKLでも作ろうと思いましたが、障害が多く実現できなかった。そんな時、DAIWAさんが『うちにありますよ』と。それも磁石を使ったサイレントにできますよ」

現在はSTEEZダブルクラッチとして知られるモデルは、細身の水深可変ジャークベイトとして泉が開発。任意の水深までただ巻きで潜らせた後にトゥイッチで誘うのが基本。幅広かつやや高めに配置されたアイにより、ただ巻きで潜り、トゥイッチで横方向にダートを見せ一定層をキープ。サクサク加工を施したサイレントオシレートで飛びも万全。ただその、かつてスマッシュヒットを飛ばしたダブルクラッチには磁石がなかった。「ロングミノーともなれば、トゥイッチ後にボディが逆さまになってしまう。磁石を使った重心移動がどうしても必要だった。ただ難点は、バルサのハンドメイドであれば内部の腹側に沿って重心を置ける。しかし、インジェクションだと構造上、斜めに入るのでもう一つ下には置けない」

泉は「システムとしてはもちろん優れている」と前置きしてこう語った。そのデメリットを解消したのはリップの角度と大きさ。ミリ単位で煮詰め「これ以上はない」という限界まで攻めた。「サイズは130mmクラス。110mmは既に

世に数多く存在する。細身のHMKL本栖をベースにしているので、全長の割にはボリューム感がなく食わせやすいのではないかと」

HMKL本栖とは体高の低いミノーの総称。対して体高の高いミノーはHMKL姫と呼ばれる。国内バスフィッシング発祥の聖地・芦ノ湖で古くから基準となってきたのが全長13cm。バスではなく、トラウトの基準ではあったが、敢えてそこにも挑んだという。「良いルアーって、過去にはラバがいましたね。若かりし日はマスが釣れるのは良いルアーとされ、マスが釣れるならバスはチョロいとも考えられていたんですよ」

最終テストの舞台はそのまさに芦ノ湖。「HMKLミノーSTEEZカスタム」がいざ完成の瞬間を迎える。

「使ってみたらあっさり55cmの個体。トラウトもよく釣れた。何も問題がない。その後、多くの仲間たちも使ってくれて、使えば釣れることもわかっていったんです」

当時使用していたロッドは『STEEZ 651 MMHRB スペクター』、通称15スペクター。このモデルをベースに、今季は自身が手がけた『C65M/ML-SV-ST スペクター』、通称26スペクターが産声を上げる。

## 生涯現役、錆びない刀。STEEZと共に

「昔はミノーって春先だけに使うルアーとされていたんですよ。他のシーズンに使うと小さい魚が釣れてしまうと。FFS（フォワード・フィッシング・ソナー）の登場はまさに良いタイミングですね。ミノーは中層で誘って使いやすいハードベイトの代表格。FFSによって、全シーズンでミノーの出番が増えてきましたね」

泉の使い方はシンプルで、「上を意識して

いる魚に対して、2ジャーク1ポーズ」。魚のいるレンジが深いなら、巻いて潜らせてから2ジャーク1ポーズ。ただ巻きでもよいが、食わせのタイミングを作るポーズは大切だ。

「竿は真ん中から曲がってルアーがしっかり飛んで、硬めのティップでちゃんと動く26スペクター。ミノーの動き、水中の様子が手に取るようにわかる。今はサイズダウン版の11cmモデルも開発していますが、テストがよりスムーズに進むようになってきましたね。長くお世話になってきたDAIWAさんですから、これからもやれることはやっていきますよ」

完全にHMKLのバルサモデルと同様のボリュームで再現されている『HMKLミノーSTEEZカスタム110（仮）』。今後新たなギミックも搭載予定で、本家に迫る実釣性能を身に付け始めている。

「ミノー、細いルアー。他のルアーとは異なる魚っぽい見た目。それでいて、左右に動いたり機能する。釣りを始めた頃から、これが釣れるという考え方は変わらない。何がよいのか？それがわかっていたら、連戦連勝ですよ、フフフ。結果が出たものこそが答え。先が見えないところが、ルアーの楽しさだと思うんですよ。可能性を感じるでしょ」

賢人かく語りき。現在は国内最高峰トップ50シリーズから一時退き、JB 枥原湖をメインに活動。JB 草創期から最前線で活躍してきた泉は、その貢献度からトップ50永久シード権を得ていたが、敢えて行使することにはなかった。「ただ続けるより、一度下でやってみて、一番を獲って戻ってきますよ。そっちのほうがかっこいいですからね、フフフ」

泉和摩、御歳70歳。DAIWA WORKS 最高齢にして最も長くDAIWAを支え続けてきた男。

生涯現役、錆びない刀。その背中からルアーとは何かを学びたい。





Shuya  
Akabane



Takuya  
Hashimoto

# 究極を求め、タフ極まる現場の打開へ

年々厳しさを増し続けるフィールド、減少傾向の個体数。「1つのミスも許されない」

ボーン素材による高浮力が絶妙に水に絡みつき艶かしいアクションを演出。水面でほぼ水平浮きの姿勢は、魚に危機感を与えないソフトな着水音をもたらし魚を散らさない。

何よりトップウォーター専用ロッドやラインを用意せずとも、現代バスフィッシングラインの主流・フロロカーボンで存分に機能することは心強い。帯同できるタックルが制限される岸釣りやレンタルボートにおいては強い味方だ。

それが『STEEZ ポッパー』。ややもすれば同工異曲と呼ばれるポッパー界では異色の存在。独自の構造が話題を呼び、発売から今なおロングセラー作品として巷を賑わせている。霞ヶ浦をホームグラウンドとする橋本卓哉による意欲作だ。「開発期間は過去最長だったと思う。どうしてもフロロのバーサタイルタックルで使えるポッパーにしたかった。専用タックルを用意するのが億劫。でも、フロロって沈んで操作に難が出る。でも、そこをメリットに繋げられないかな、って」

自身が培ってきた濃密な経験をルアー開発に注ぐ作業が始まる。

「水面から沈んだフロロがポッパーの前にあるからこそ、甘いポップ音に繋がる。直立タイプではなく水平浮きでも、スムーズなアクションに繋がる」

いわば「釣果にこだわった」からこそこの浮き姿勢だった。だが、時代の変化は無情だった。橋本のホーム霞ヶ浦に異変が起きる。

「近年ボストスボン期に注目されているのがエビパターン。産卵を終えた魚は泳ぎ回る小魚を追うより、大きく移動しないエビを捕食するのが常。

というより、今は小魚が極端に少ないのが現状。エビしかないと言ってもいい状況になった」

アシを始めとするベジテーションの際に潜むエビをバスは捕食する。その様子をポッパーでイミテートするには、よりスローに、より移動距離を短くする必要があった。

「ほんの少し、ほんの少しだけリアに重心が移ればアクションの初動レスポンスや、バイト時のフッキング性能も格段に上がる。そこに改めて気付かされることになった」

チューニングを施したSTEEZ ポッパーは、現場で想像以上の釣果をもたらした。使い込んできた中でのふとした気付きは「世に共有すべき」という橋本の結論に至った。



「年々厳しくなるフィールド、数少ない個体。たった1つの小さなミスも許されない状況で、丁寧にじっくりと釣るポッパーはどうしても必要な手駒。普通は一旦リリースしたルアーを作り直すことなんてできない。納得いくまでやらせてくれるのがSTEEZ ルアー。ほんの少しのウエイト追加でも理解してくれてより良いモノが完成する」

既存60FのRear(リア)にWeight(ウェイト)を追加した、いわばファクトリーチューニング

モデル『STEEZ ポッパー60F RW』が誕生。

常に釣ることにフォーカスしたSTEEZ ルアー。究極へと真摯に向き合っている橋本卓哉は件のポッパーのみならず、アスロックやイグラのスピナーベイト、ワームでは人気YouTuber カスブラとの協業作となるブラーモ及びデカブラーモも開発してきた。

「エビを意識したルアー作りたよねって、船の俺と陸の彼ら、お互いの意見を交わし合って形が出来上がっていった」

さらにSTEEZ ルアーの可能性は広がっていく。

## 小型で口を使わせる橋本 遠投で警戒心解く赤羽

STEEZ ポッパーのラインナップを改めて見返すと、軸となる60F RWを中心に、小型の50F、そして大型の70Fが存在する。前者2つは橋本による開発モデルだが、『STEEZ ポッパー70F』は、実は開発者が異なる。

それは橋本と同じ霞ヶ浦をホームとする手練、赤羽修弥だ。DシャッドやDシャイナーからSTEEZ シャッドへ、ネコストレートからSTEEZ ネコストレートへと、STEEZ ルアー立ち上げ以前から数々の作品を手がけてきたMr. 質実剛健。多くのスマッシュヒットを生み出し続ける鉄人だ。

「ベイトで投げやすく、よく飛ぶ大型のポッパーが欲しかった。でかい重いから風にも負けない」

橋本による小型サイズは、接近戦でのテクニカルな操作によって釣果を導くモデルである



## Chapter 11

# 赤羽 修弥 橋本 卓哉 佐々木 勝也

Katsuya  
Sasaki



のに対して、赤羽は距離をとったアプローチでターゲットに警戒心を与えず広範囲から水面へと吸い上げる。手法は違えど、いずれもタフな現状に対応するモデルと言えるだろう。



やや斜め浮きのウェイトバランスで、飛距離重視のセッティング。軽快に首を振ってスプラッシュを見せるアピール系ポッパー。遠投した先で1アクション目から首尾よく動く。

「ショートキャストならよりアキュラシーが高まる。霞ヶ浦水系のみならず、ビッグレイクやリザーバーでも使いやすい」

50Fと60F RWはボーン素材を採用した高浮力モデルだが、70Fにはクリアカラーもラインナップ。光の反射を利用したアピールも可能だ。

数々のモデルを手がけてきた赤羽だが、特に思い入れのあるモデルを問うところ返ってきた。「後のSTEEZシャッドとなる、Dシャッド60SPを開発したときかな」

今から14年前、カタログ上では2011年の2月に発売を予定していたモデルだ。だが、実際の発売は5月となった。

シャッドという性質上、低水温期での使用機会が多く、既に春を迎えている5月では時期が遅い。

「最終プロトの仕上がりがどうしても納得がいかなかった。年が明ける頃、ちょっとしたことで入院した時期があって、どうしても完成させたいから抜け出してフィールドテストに行ったこともあった」

潜行角度が赤羽の理想とは程遠かった。身体に無理を利かせてでもテストを繰り返した

が、発売日は延期を余儀なくされた。

「買ってくれた人が使ったとき、何これ?ってなるのは嫌じゃん。不具合がありながら発売したら、俺だけの問題じゃない。DAIWA WORKS皆で作り上げてきたSTEEZブランド全体の汚点にもしたくない」

常に全力投球の開発姿勢。その後、赤羽はガード付きブレードッドスイムジグの先駆け・STEEZカバーチャーターなどのヒット作も精力的に生み出し続けてきた。

「今後は、バズベイト。既にやりたいところまではできている。開発期間? 5年は経ったと思う。やれるところまでやらせてくれる。そこはDAIWAの良いところだよ」

## 大型は優れたルアーだけが仕留めることができる

赤羽が手がけたネコリグをメインとする秀作ワームといえば、STEEZネコストレート。他との差異を出しにくいストレートワームという単調な形状とはいえ、全面を覆ったリブが強い水押しを見せバスの食いを誘う。

このアドバンテージに早くから着目して、大胆にも2本の5.8in.を繋げロングワームの切り札として武器にしていたのが、佐々木勝也だった。自作の時点からの呼び名「STEEZネコストロング」はそのまま製品の略称となった。



キッケルキッカー、シュリンビード、キッケルカーリー、バンクフラッター、グラディカル、そして

ネコストロングへ。陸を主戦場とする佐々木ならではの鋭い視点が際立った作品の数々。最新作として今世の熱い視線を浴びているのが「STEEZクアッドフォーゼ」だ。国内のみならず、早くも太平洋の向こう側・米国市場からの視線も熱く、入手困難な状態が続いている。「注目したのは、エラストマー素材ワームのラバー刺し。元々釣れるルアーにラバーを刺すと、いきなり極端に反応が良くなることがある。それがルアーパワーだと思う」

ショアコンペティターとして知られる佐々木だが、近年はレンタルボートにも傾倒。ルアー開発にはFFS(フォワード・フィッシング・ソナー)を活用して、魚の反応を伺うことも少なくない。

食わせやすい小粒。細かく太いリブ形状は、水を掴んで押す。そこに両サイドからラバーが加わることで、生命感が加わる。

「ラバー刺して、ただ刺せばいいわけじゃない。刺し方、位置、本数、長さで格段に反応が変わる。ボートにラバーを持ち込んで幾度ものテストを重ねた」

左右対称ボディを分割して、運用できることも佐々木ならではのアイデアだ。

「1つのワームを何通りにも使いこなせば、持ち歩くルアーの数を減らせる。ポリウムで反応が変わる、複数モードの運用で使い所が増える」

リグはノーシンカーからダウンショット、モリケンリグなどあらゆるライトリグに対応。2年半の歳月を経て、「SC S69UL キングボルトフィネス スペック69」の開発と共に、さらに完成度を高めていった経緯がある。

霞ヶ浦で50センチ以上を常に求め、ロクマルを真剣に狙う男・佐々木勝也。「55センチ以上はルアーが優れていないと釣れない」という研ぎ澄まされた感性も持つ。

釣ることに貪欲なまでにこだわり続ける佐々木。次回作にも期待値は上がっていく。





## Chapter 12

# 長谷川 耕司 三宅 貴浩 小島 明久

## 誰でも簡単に大型と渡り合えるために

熟練のプロガイドが求めたのは、使う者を選ばない“ビッグワン攻略”モデル。

「DAIWA ルアーへの思い入れは強い。子供の頃、身近にバスがいなかった私は、ナマズからルアーフィッシングを始めた。大きくて肉厚のスプーン・ダンサー、ヘッド側の左右が特徴的なミノー・コネリーⅡなど。当時から少年でも買いやすい価格で、よく釣れた思い出がある」

ビッグレイクを舞台に数々の伝説をつくって来た男・長谷川耕司。けなけなしの小遣いでDAIWA ルアーを手に入れていた少年期から、今やSTEEZ ルアーの開発に関わる存在へとなった。彼が一躍脚光を浴びることになったのは『STEEZ ブロップ』だろう。



国内でシンキングスイッチャーという新たなカテゴリーを生み出した第一人者。かつて『ガストネード』が発表された際、そのこだわりをDAIWA エンジニアへと語ったことが開発の始まりだったという。

「2000年代中盤、シンキングスイッチャーって他に存在していなかった。そのため作り込めなかった部分があったのも事実で、それが心残りだった。長く使い込んできて、さらに細かい部分まで作り込みたかった」

最も重要視したのはベラだったという。

「それも強度。ボディがほんの少しでも動いたら、即座に回り始めるレスポンスの高さはもちろん、ボディが揺れずロールしないことも大切。シンキングスイッチャーは大きくするほど、着水時の圧力でベラが曲がりやすい。かといって強度を上げると、回転レスポンスに支障が出てしまう」

新たなシンキングスイッチャーを作り込んでいく中で、ベースとなるトップウォーターのダブルスイッチャーがあった。ミレニアム前後に故本山博之氏が手がけた作品。氏はDAIWAと長らくリール契約を続けていたレジェンドで、晩年は溪流でのベイトフィネスゲームを提唱するなど後世に残した功績は大きい。長谷川は生前に親交が厚く、共に湖上で釣りを楽しむこともあったという。

「そのあまりにも強いベラに感銘を受けた。スイッチャーが何たるかの教えを受けることもあった。ただベラに関しては何も聞けないままだった」

長谷川はそのベラの強度に、素材の差を疑った。DAIWAは即座に成分解析テストを行い、長谷川へと結果を伝えた。

「素材は全く同じだった。奇しくもその連絡を受けた日、本山さんが急逝された…」

あまりにも劇的な展開だった。長谷川は本山氏の意志を継ぎ、シンキングスイッチャーに精魂を込めた。

「強度は曲げ方に秘密があった。ベラの1枚1枚が平面のままだと、着水圧で曲がってしまう。縦方向に曲げることで強度を増した」

ベラが完成した一方で、ボディは存分な太さを持ちながらも長過ぎないボリュームに敢えて設計。かつてシンキングスイッチャーを開発して以降、各メーカーからフィネス寄りのモデルが数多くリリースされたが、そこには寄せず独自の路線を突き進んだ。

「フィネス寄りでは太いラインに対応できない。ビッグレイクでロクマルを真剣に狙うモデルとして、太軸フックを乗せる必要があった」

さらには長らくガイドを務めてきた長谷川ならではの多角的な目線を見せた。

「ルアーを動かすとき、ただ巻きなら何も難しくない。その反面、水の抵抗の少ないルアーなので、効果的に使うには抵抗のあるクランクベイトなどとは別方向の難しさがあるのも事実。だから、使い方のプロモーションは欠かせない」

それは、誰でも簡単にロクマルが狙えるルアーへと昇華するために。

### 使い方だけでも極力優しくしたい

「スターリングとは水の攪拌を意味する英単語。いわば水押しがシリーズコンセプト。そして何より使いやすくて、釣れる」

プロガイドの三宅貴浩が手がけるSTEEZ ルアーは、釣れ筋ワーム・スターリングシリーズ。スターリングシャッド・スターリングフィッシュ・スターリングツインに加え、2026年は4作目となる『スターリングシュリンプ』が登場する。



Takahiro  
Miyake

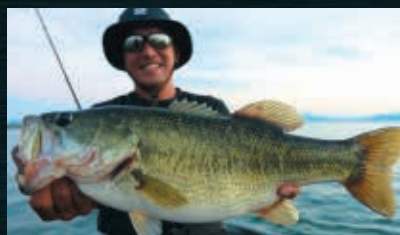


Akihisa  
Kojima



「バスはルアーの波動を側線で気付くとされる。しかし、側線で気付けるのは数10cmに迫ったときだけ。それよりは見た目、視覚的効果のほうが重要だと思う」

自在に見せるロールアクションに加え、体表のラメ、空気室による太陽光の自然な反射がフレキシブルに発生。他にはないビジュアルがバイトを誘う。



「プロガイドとして、ゲストさんが使いやすいことが開発のベースになっている」

様々なスキルのゲストを迎えても、バツと見ただけでセッティングしやすいその構造。ワームに反射板を2枚内蔵することで、その中間にフックセットが可能なツインフラッシュ構造、そしてフックセットアシストマーカーやボディスリット、ネイルシンカーを挿入しやすいネイルホールなど、簡単にセッティングできるゲスト目線のモノづくりがそこにある。「アクション的には、ワーム自体がしっかり水を掴むことをベースに作り上げた」

ツインなら動き過ぎない中で水を押すボリューム感。シャッドなら動き過ぎず弱過ぎない、誰が使っても絶妙な水押し。フィッシュはミドストやダウンショットで簡単にロールを引き出せるセッティング。

「使いやすさが最も大切。かといって、小型の数釣り用ではない。大きな魚も釣れるのがビッグレイク。太軸フックにも対応して、タックルもそれ相応のモデルを勧めている」

新たに登場する『スターリングシュリンプ』にも

三宅の想いが詰まっている。

「シュリンプはネコリグで刺しやすいネイルホール、フックを指すチューブセッティングのガイドも搭載。ダウンショットではオフセットフックでも使いやすく、スイミング時の泳ぎも秀逸。脚を足すことで、ボトムでの倒れ込みもよりスローになる」

近年厳しさを増すビッグレイク。時に1本を仕留めることも困難な状況にも遭遇する。「フィールドは難しくなっているが、使い方は優しくしたい」

誰でも簡単に実践しやすいルアー、普段使いのできるルアーがスターリングシリーズだ。

### 難しいルアーは 手に取ってもらえない

システムクランク・『STEEZクランク』のリニューアルに際して、開発者として白羽の矢が立ったのが巻き物スペシャリスト・小島明久。プロガイドとしても活躍する小島もまたゲスト目線のモノづくりは欠かさない。

例えばSTEEZクランクには350というモデルが存在する。700、500とラインナップする中で、通常であれば、そこに続く数字としてシステムクランクには400か300というキリの良い数字で、その潜行深度(cm)を示すものだ。「リザーバーを始めとする全国のフィールドには、水深3~5mにコンタクトポイントが多い」

小島が長らく培ってきた経験値を前提に開発が始まった。

「特にビッグレイクは3~3.5mを引ければいい。そのゾーンをより長く引くためには、表示より潜行深度を深くしたモデルを作る必要があった。いずれのモデルもその名より“プラス20cm”の潜行深度を与えた。350なら370として機能。狙いが350のゾーンだとしても、370なら到達時間が早く、長く引くことができる。短い飛距離

でも到達できる」

浮力を抑えたタイトなウォブリングを見せるワーミングクランクが350。小粒に仕上げたボディはビッグレイクのみならず、日本全国のフィールドで使いやすい。

「元々は、700が最初期モデル。ディープと呼べる水深に、パワーはあるが他よりコンパクトなクランクを送り込みたかった。そのレンジに到達できる従来のクランクは何より巻き感が重く、使い手を選ぶモデルだった」

巻き重りを解消したのは、そのリップ形状。潜行能力を維持する長さを持ちながら、先端方向が反り返ったリップ。根掛かりを防ぐべく高めの浮力設定に仕上げたが、優れたボディバランスが潜行能力を向上させた。最大720レンジへと到達して、よりプロダクティブゾーンを稼ぐことが可能だ。

白眉だったのが500。前作よりボディが大きくなったことで高浮力化。リップ先端がカバーに当たれば、キックバックして戻るカバークランクの様相。従来のディープクランクとはまた別の方向性を得た。



「全国のリザーバー、特に関東でディープのカバークランクとして定評を得ている。使い方が難しいルアーは、手にしてもらえてもその後長くは使ってもらえないと思う」

長谷川、三宅と同じく、小島もプロガイドとしてゲスト目線のモノづくり。総じて西日本発信のSTEEZルアーには、ユーザー愛が宿っていると言えそうだ。



# SLP WORKS

## STEEZ SLP WORKS CHRONICLE

- 2011 ● DAIWA公認カスタムブランド“SLP WORKS”誕生。  
トーナメンター橋本卓哉、ビッグレイクガイドの三宅貴浩と契約。  
「STEEZパワーマグブレーキチューン」サービスを展開する。
- 2012 ● トーナメンター篠塚亮、鈴木隆之と契約。
- 2017 ● 16STEEZ SV TW セミオーダーシステム開始。
- 2018 ● STEEZ A TW セミオーダーシステム開始。
- 2019 ● オカッパリランガンのスペシャリスト岡友成と契約。  
18EXIST セミオーダーシステム開始。
- 2020 ● STEEZ CT SV TW セミオーダーシステム開始。
- 2022 ● 世界に挑戦する藤田京弥と契約。  
SLP WORKS「クイックドラグノブ」装着の  
EXIST LT2500S-XHを駆使して  
B.A.S.S.初年度でエリート昇格権を獲得。
- 2023 ● 22EXIST セミオーダーシステム、  
EXIST センシティブチューンを開始。
- 2024 ● B.A.S.S.オープンに参戦する青木唯と契約。
- 2025 ● 24STEEZ SV TW セミオーダーシステム開始。
- 2026 ● EXIST20周年を記念したセミオーダーシステムが限定発売。

## 第3世代“STEEZ”を 自分仕様に。

高剛性・高精度・φ32mmの極限マシン「24STEEZ SV TW」を  
自分仕様に組み上げられる——。

ギア比、スプール、ハンドル、ハンドルノブを選び、  
より自分好みの仕様にカスタマイズが可能。

HYPERDRIVE  
DESIGN

ULTIMATECASTING  
DESIGN

TWS  
T-Wing Spools

SV  
BOOST



カスタムイメージをシミュレーションできる専用サイト  
釣種別のオススメ紹介やオーダーもこちらから。

<https://slpworks-order.com/steez/>



# 釣り具を正しくお使いいただくために

釣りを安全に楽しんでいただくために、  
商品に添付しております『取り扱い説明書』を必ずお読みください。

## ■安全にお使いいただくために

お使いになる人や他の人への危害及び財産への損害を未然に防止するため、取扱説明書や本体ラベルに表示された内容は必ずお守りください。  
取扱説明書及びラベルのマークの意味は次のようになっています。



この表示は「人が  
死亡または重傷  
を負う可能性が  
想定される内容」  
を示しています。



この表示は「人が損害  
を負う可能性が  
想定される内容や  
物の損害の発生が  
想定される内容」  
を示しています。

## 両軸受リール

### 使用方法に関する事項



●糸をリードするレベルワインドの所に指を近づけて、釣りをしないでください。指をはさまれてけがをするおそれがあります。  
●ハンドルとボディの間に手をはさむと、けがをするおそれがあります。



●ストップバーのあるリールはストップバーをOFFにして釣っているとハンドル等が逆転し、手に当たりけがをするおそれがあります。  
●糸が勢いよく出ている時は、糸にふれないでください。糸で指を切るおそれがあります。  
●自重は素材、表面処理、部品等により、バラツキが生じる場合がありますのでご了承ください。



●回転しているスプールには触れる場合は十分に注意してください。けがをするおそれがあります。

## 疑似餌(ハリあり)・疑似餌(ハリなし)

### 使用方法に関する事項



●針先は危険です。取り扱いには注意してください。  
●キャスト(投げる)時は、周囲の安全を確かめ、危険のないことを確認してください。  
周囲に人がいると針が刺さり、けがをさせるおそれがあります。  
●釣り以外の目的に使用しないでください。  
●塗装の上塗りには、変質や不具合を起こす場合があります。予めご了承ください。

### 保管に関する事項



●子供または幼児の手の届かないところに保管してください。  
●屋内であっても直射日光の当たる場所、炎天下の車内等、高温になる場所を避けて保管してください。  
●プラスチック製のものの上に放置すると、変形させるおそれがあります。

## 釣竿(一部玉網を含む)

### 使用方法に関する事項



#### ●電線との接触による感電

高圧線・線路・鉄橋等の電線による感電に注意して下さい。  
釣竿は素材特性上、電気をよく伝えます。特に電線等に接触、または、釣竿を近づけただけでも感電して死亡事故の原因となります。釣り場を移動する時は竿をたたみ、高圧線・線路・鉄橋等の電線の下または近くでは絶対に使用しないでください。

#### ●落雷による感電

落雷による感電に注意してください。使用中、雷が発生した時は、ただちに釣竿から離れ、安全な場所に避難してください。落雷による感電死を招くおそれがあります。

#### ●釣り場以外の電線による感電

釣り場以外で釣竿を使用し、電線に触れる事故が発生しています。  
釣竿を使用する時は、周囲の安全に十分注意してください。感電による感電死を招くおそれがあります。



#### ●キャスト(投げる)時の注意

キャスト(投げる)時は、周囲に人がいないか、十分に安全を確認してください。  
釣針が人にささったり、ルアーフック、オモリ等が人に当たると非常に危険で、重大事故に繋がるおそれがあります。



#### ●固着のゆるめ方

釣竿の固着(継ぎ目が食い込んで外れない時)は、継目の両側近くに、すべり止めを当てて握り、互いに逆方向へヒネリながら押し(振出す場合)、継目をゆるめてください。その際、一気に力を入れると釣竿の継目に手をはさみ、けがをするおそれがあります。

#### ●根掛かりの外し方

根掛かり(水中、陸上での障害物に仕掛けが絡みはずれない状態)した時は、無理に竿をあおらないでください。  
竿が折れたり、外れた仕掛けが飛んできて、けがをするおそれがあります。根掛かりは、出来るだけ、糸を手にとって引っ張って糸を切ってください。その際、糸で手を切ることがありますので、手袋やタオルで手を保護してください。  
太ハリスご使用の場合は、手で切るのが危険な場合がございます。十分にご注意ください。

#### ●破損時の取り扱い方

使用中、万が一釣竿が破損(折れ、割れ、欠け、剥離)した場合、破損した箇所や破片で手などにけがをするおそれがあります。



●自重は素材・塗料・部品等により、ばらつきますので標準自重で表示しております。  
●全長は合わせの深さ等により、ばらつきますので標準全長で表示しております。標準自重・標準全長、その他の仕様も公正競争規約に基づき表示しております。  
●竿は一本一本作業で仕上げられています。そのため商品により多少の色、質感のバラツキが生じる場合がありますのでご了承ください。  
●元竿表示は、元節の元端位置の素材外径を表示しております。但し、磯竿、溪流竿は元端より竿先側に50mmの位置、船竿は元端より竿先側に100mmの位置の素材外径を表示しております。



DAIWAアプリが釣りをもっと楽しくする。

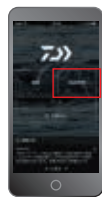
# DAIWA App (ダイワ アプリ)

- ① 面倒だった重さ、長さ、ラインの計算を一瞬で
- ② バーコードにアプリをかざすだけ。製品情報に速攻アクセス
- ③ 幅広いジャンルの動画の中からあなた好みの動画を自動でおすすめ
- ④ 好きな動画はすぐにお気に入り登録「また観たい。」そのタイミングを逃さない

DAIWAアプリのご紹介・操作方法・「よくあるご質問」などアプリの情報はQRコードから閲覧できるページでご確認ください。



## DAIWA Appによる、 バーコード検索の方法



1 TOP画面右上、「製品情報」をタップ。



2 上段、左から2番目「バーコードスキャン」をタップ。



3 あとは気になった商品のバーコードをかざすだけ。



4 すぐに製品ページへ。気軽に詳細を確認できる。

# グローブライド株式会社

〒203-8511 東京都東久留米市前沢3-14-16

www.globeride.co.jp

お客様センター

0120-506-204 (無料)

www.daiwa.com/jp/

受付時間:9時~17時(土日祝日は除く)  
携帯電話からもご利用いただけます



このマークのある釣竿は、全国釣竿公正取引協議会が「釣竿の表示に関する公正競争規約」ののっとり、責任をもって認定したものです。



このマークは(公財)日本釣振興会が、日本の「釣り」と「釣り環境」をよりよく発展させるため設けた「釣り振興事業資金拠出」に協力している商品についてあります。



このマークの表示された商品の釣り上げの時は、釣りの楽しさ、釣り人の安全へのつなぐ。釣竿の安全と環境の持続可能性を重視し、セパレート型でつくるLOVE BLUE(釣り振興事業)の発展として活動してまいります。



STEEZ 2026年1月16日発行



